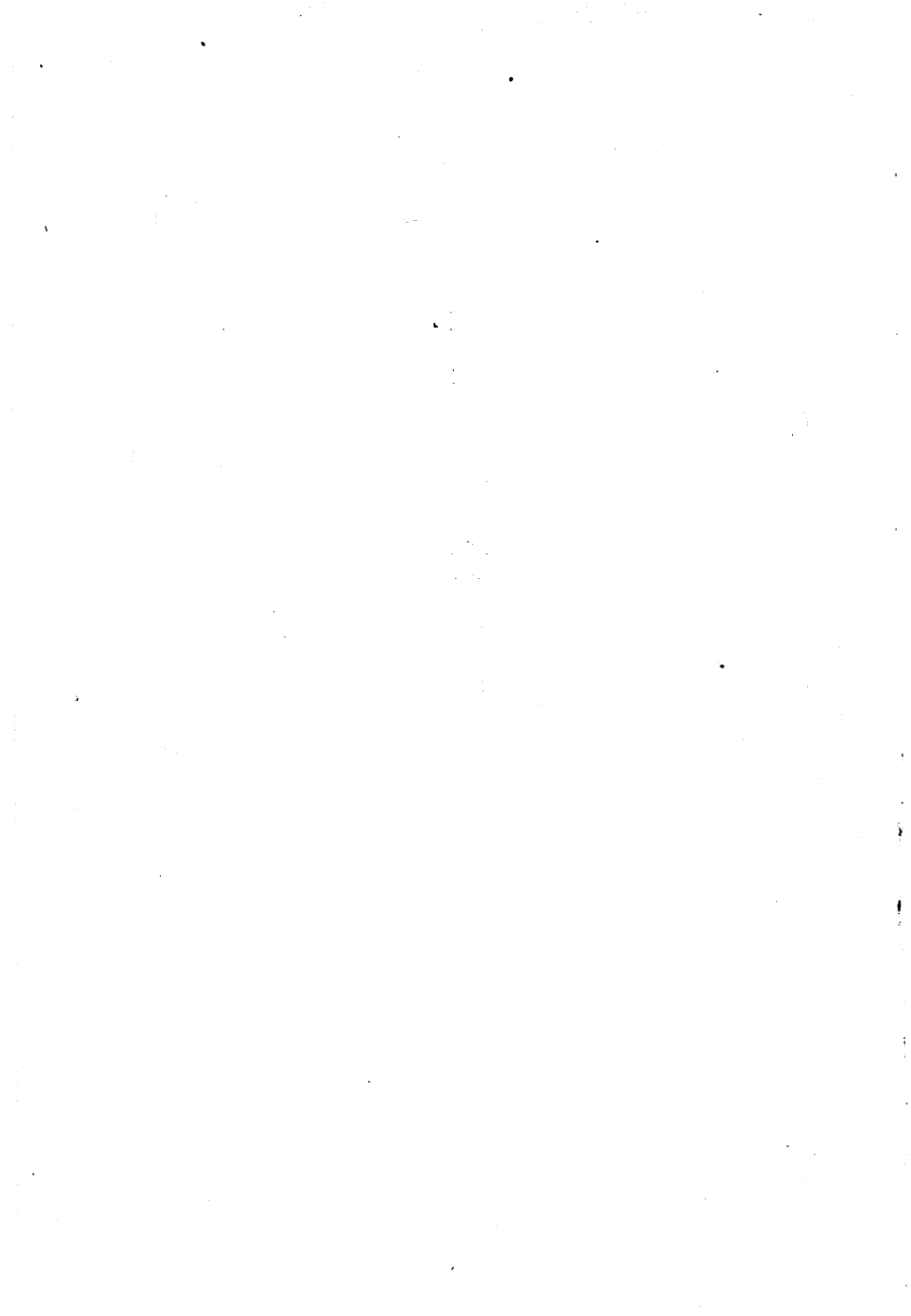


和田合戦女舞鶴



和 田 合 戦 女 舞 鶴

作 者 並 木 宗 輔
府 本 豊 竹 越 前 少 掾

序詞地理全書を閲するに。金は武備甲兵を司り。倉の字は一君と書けりと云々。前武衛賴朝卿。御子孫無窮の居城を考へ。三つ葉四つ葉の殿作。宜も當みけり鎌倉山。ヨロシ松も常盤の。陰ひさし。地色長男。賴家早世在し。御次男實朝御家督ながら。御弱年におはす故。御母平の政子禪尼。簾中にて政を輔佐し。男まさりの智恵の海。蝦夷が千島の隅々迄滞なき御恵。悦ぶ民の諺に尼將軍とかしづかれ。用ゆるときは虎の間に。御簾揚げさせて座し給ふ。床をならべてましますは。實朝卿の御妹齋姫。今年三五の玉かづら。嶽入盛りの海棠や。おのれとひらく花の顔。フシ錦。色どる風情なり。地色目通りに三老職。年若なれども北條の嫡男。江馬の太郎義時。和田新左衛門の尉常盛。其外の大名小名。男女別有る威儀を改め。遠侍に蹲踞する。尼君仰せ出さるゝは。調此度大樹任職の勅使として。參議中の院爲氏卿。今日館へ入興有る山。折こそあれ實朝大江の廣元。其外物なれの老臣どもを召つれ。奥州一見の留守の内。當惑ながら是非もなし。地色かたぐ心をつけ合せ。故實を守り萬事萬端。無禮麁相の無きやうと。仰せに兩人頭をさげ。詞御謎の如く無骨の我々。饗應覺束なく候へ共。先格を以て相はからひ申すべし。地色御心やすく思し召せと。受けがふ内に門前の。オクリ塵を拂ふや長袖の。フシ姿の雅び。爲氏卿。悠々と入り給へば。尼君親子褥を立ち。席を譲つて拜趣の。フシ禮嚴かに平伏ある。地色勅使は座上に威儀を繕ひ。宣命開き讀上げ給

ふ。詞それ天子は天命を稟^うけて王制^{わうせい}を正しうし。將軍は王命^{わうめい}を奉^{ほう}けて以て將道^{しやうだう}を守る。實朝武將の器たるによつて宜敷く征夷大將軍に任ずべし。母政子は從二位禪尼に叙す。建曆元年秋七月と讀終つて。地直に口宣を渡さるれば。尼君ハツト頂戴^{ふたがい}有り。詞器量過分の重職。天恩謝するに詞なく侍ふ。就中實朝儀。千賀の鹽籠一見とて。罷出でしは先月朔日。お勅使京都を御發駕と。承りしは一昨々日。飛脚を走らせ候へ共。長途の延引恐れ入つたる仕合と。地謹んで宣へば爲氏御機嫌麗しく。近頃以て奇特の至り。所々の要害國民の。邪正を知るは武の學文。名所古跡は歌のしるべ。父頼朝の好まれし家の風こそ優しけれ。詞それなるは齋姫よの。京はづかしき立振舞。地色和歌に心もありつらん都の土室に聞たやと。フシゑくぼに水を汲交す。地色詞の艶に齋姫包むに餘る嬉しさに。コハ恥しき御仰せ。詞花になく驚水に住む蛙迄。歌詠むものとは聞ぬれど。地田舎に住めば師匠無し。腰折一首得詠まぬ事口惜しう候ふ故。大内方の宮仕へかねく願ひある折から。今日お目見得を縁にて京が見たやの挨拶も。間渡しならぬ壁訴訟。何れ戀路の下地かや。地色渡りに舟の爲氏卿田面の雁の一向に。君が方にぞよるといふ。母のお許し有るならば臈て京より聲がねの。迎ひの輿を參らせんと。戯れ給へば尼君は。擬て有難きお詞や蝶や花やと齋姫。都の殿に迎へられ櫓扇持つて緋の袴。見る目は老の安樂と。奥底も無き詞の唯中。江馬の太郎進み出て。詞シ、申し暫く。尼君には未だ御存じなされずや。齋姫は成人の後。某が妻女に致させよと。先將軍頼家卿の御内證。他へ御縁組御無用と。地言はせも立てず常盛聲に角立て。詞此新左衛門に妻合すとの。頼家卿の御遺言。地他人の戀慕は叶はずと云ふに義時ぎよつとして。詞何の宣ふ和田殿。只今のお詞は。先將軍のお差圖とな。ナカ。貴殿にもお差圖とな。ナカナカ。ム、疑ふにはあらねども。證據ばし候か。オ、證據は則ち藤澤四郎。手前の使者は其親入道安靜。ハ、ハ、ハ。そりや寢言をおつしやるか。イヤ御邊は酔狂めされたの。ナント武士に向つて酔狂とは。侍が寢言を言ふとは。ハテ寢言で有るまいか。齋姫は某が妻女さ。ハレ白痴た事ばかり。地姫の夫は此新左衛門常盛。金輪奈落我が女房。

詞アレまだどんな男が有る。忝くも此北條が奥方に。地指でも差いたら許さぬぞ。汝を我を。己れをと互に刀に手にかけて。フシ既に斯うよと見えければ。地色尼君聲かけヤレまで兩人。詞頼家が遺言とは自らとていぶかしけれど。大切の客人さね。殊更實朝留守といひ。地色勅使に無禮は天子へ恐れ。平にと鎮め給へども。兩人若氣の詞を揃へ。詞御諒には候へ共。先御代よりお目がねにて。相動むる三老職。虚言者と思し召さん。勅使のお心京都の聞え。地御政道の障りとならんお家の疵には代へられず慮外は御免下さるべし。詞イザ抜け北條。サア抜け和田。地ぬけぬけと立ちかゝり。フシ無二無三に詰寄れば。詞ヤア遠侍に誰か有る。それ鎮めよと御諒の内。地色阿佐利の與市義遠御前に候と。烏帽子にあらで。笄。六尺豊の大女房。雲に羽をのす鶴の丸。大紋袴踏みしたきゆらり。ゆさゆさしやなしやなと。争ふなかへ怖氣もなくしやんと分け入る梅枝は。いかな龍虎も香に愛て。フシ勢ひとまるばかりなり。地色さすがの和田も北條も。呆れて顔を打守り。詞ム、汝は阿佐利が連添ふ板額よな。武士と武士との争ひ。女童の知らぬ事。地退つてあよときめ付ければ。詞ホ、、、オ、輕骨。わたしも主のある身ぢやもの。色好みな殿達へ手をさすも不慮と。大きな體を隔ての櫃。破れぬ内にしづめるはお上への御奉公。お勅使のお入につき。夫阿佐利は町廻り。非常を正す外の役。内を勤の仰せを受け。地色お次に控へる侍役。ふはさはなさるりや何時迄も。おしづめ申す私が役。お止りあれば其通り。もしさも今度は又。力業で留めますぞや。詞ヤア慮外なる女。汝が力におぢ恐れ。武士道立てず安閑と歸もんですまさうか。地色退かずばおのれときつばを廻せば。此方もひるまぬ女の大兵。握りひしがん眼は八角。和田北條は手練の兵衛。うかつに抜かず退ぞかず。三隅になつて争ふは。蛇と蛙の真中へでんく蝸牛の笄わけ。つのめかなめとフシにらみ合ふ。地色爲氏いらつて制し給ひ。詞關東武士と諺に。聞きしにまさるむくつけ者ども。心あらばよく聞け。普天の下率土の濱。王土にあらずと言ふことなし。勅諒と聞く時は雷も地にくだり。驚もおり居る例を知らずや。取分け此爲氏が宣命使を承り。此地に逗留

する間は。鎌倉が則ち王城。此場は今日の大内なるに。人と産れて仁義を忘れ。目通りにて尾籠の振舞。王命を背く條立歸りて奏聞とげ。地色死罪流罪は後日の決斷。よく覺悟仕れと。御座をひらりと下り給へば。尼君親子は冥加も涙。お裾もすそに取付きひれふし。三人の荒者らは頭を疊にすり付けひつ付け。満座はしんと神國のフシ人の。心ぞ素直なる。地色爲氏御氣色なほらせ給ひ。調神妙く。事のり起は某が。心に思はぬ戯れごと。あやまつて改むるに憚らぬのは都風。地當つて碎くるあづま武士。双方造趣をふくむなと御拔目なき詞の釘。尼君喜悅の顔振上。調御逗留のお氣ばらし。何をがなとて方々が猿樂とやら能とやら。五品六品の其中に。紅葉狩の大夫は義時。間の役は齋姫。地お目まだるくとも御上臈。御機嫌如何と會釋ある。詞オ、何よりの變應。まだうら若き齋姫。戀のいろはの紅葉狩。相手も丁度義時と。地色御挨拶のはしを義ましくや思ひけん。新左衛門つゝと出て。詞能は不得手に候へ共。姫君のお相手に。拙者めワキを致さんと。地むつと顔なるフシどす聲つき聲。地色爲氏殆んど打笑み給ひ。遠慮會釋もならざかやこの手柏の二男。昔男の色好み業平達もこなたへと。興じて御座を立給へば。嬉しさは身に尼將軍齋の姫諸共に。ひきはかへさぬ弓八幡。思ひは花月和田北條。連理爭ふ松風の中に立舞ふ鶴の丸。男ども見え女ども裏ふき返す紅葉狩。かりそめならぬ遺趣遺恨勝負は重ねて狸々と。亂るゝも戀和らぐも。大和假名には二つ文字。牛の角文字。すぐな文字。ゆがまぬ。國こそ三重久しけれ。地清和の流れ源は幾千代かけて末廣き。扇が谷の御別殿將軍の館には。勅使爲氏儲けの爲。俄にしつらふ能舞臺御所望の番組とて。式三番弓八幡花月松風紅葉狩。切は酒宴の亂れ酒フシ狸々とこそしるされたれ。思ひは色に齋姫。爲氏卿へ戀草の。結び交さん下心いそゝとして入り給へば。御乳人の城の九郎資國。年寄役に姫の守附從へば向ふより。切幕明けて出迎ふは。荏柄が女房綱手といへる心きゝお氣に入りとて遠慮なく。詞是はまあお姫様。丁度よい時分におこし。たつた今松風が果てまして中入の最中はからは紅葉狩。お前のお役と尼君を始め。地色和田殿や北條殿も申し合せをお待ちかね。サア鏡の間へといふ

を資國。詞嫁女せはしない。姫君の御役は末社の神。能が始つてもまだ餘程間があるちつとお休め申してから。樂屋
入りをさせましたがようおりやる。其間にお袋様やシテワキの衆へ。お出で様子を咄し言合せは。夜前の通りと申
して置かうおせきなざるゝ事はおりない。地爰で暫く御休息と。心を付けて資國は。フシ奥の一間に入りにつけり。
地色姫君あたり見廻して小聲に成り。詞ナウそなたもかねぐ知つて通り。鎌倉都と隔たれども。爲氏様を見ぬ戀に
あこがれ。歌の點取にことよせ。心のたけを詠みつゞけ。地短冊にそへ玉章をお目にかけしは數知らず。一度いなせ
の御返歌もなかりしに。此度稀れのお下りこそ。願ひの叶ふ瑞相ざりながら。和田北條が争ひ故。泣寝入りにならう
かとそればかりが氣遣ひ。何とぞそもじの働きて。首尾する様に頼むぞや。詞ア、アお氣遣ひ遊ばすな。歌に名高
き爲氏様。嚙ぞ戀知りであらうもの。地色よもやつれないお返事はなされまい。幸ひ此内がよい隙間。ちよつと合せ
ましたいが。ハテどうがなと心を辞き。詞オ、それく。私は奥へ參り爲氏様のお目にかゝり。歌の詠みかた傳授
事。密かにお受け申したし。御苦勞ながら舞臺迄。ちよつとお出で下されかとあなたを爰へそびき出そ。地色差向
ひにやつてごらうじやれそれでいかずば其跡は。私が受取り仕やうもあらう。詞コレ申し相手むかひに口説くのは。
月花ではゆかぬぞえ。地身内に汗の出るやうな。べつたりとした台詞が肝もん。それを抜かり給ふなと。フシいひ教
へてぞ走り行く。地色姫君はとつゝ置いつ手短に直付とは。よささうな事なれども。お顔を見たら途中から。ぞつと
する程恥かし成つてなんにも言はれる事であるまい始めのかゝりはどう斯うと。戀のいろはの假名遣ひ。フシあぐみ
給ひし折からに。綱手がすゝめに爲氏卿。姫の心は察しながら。宥めんものときあらぬ體いうく。と歩み出で。
詞女の章を使にて詠みかた傳授所望のよし。地色なをざりならぬ事なれば憚々しくは傳へがたし。折もこそあるべき
ぞ少しも惜しむ心にあらずと。仰せにじつと會釋して。詞歌の口傳は容易くならぬとの御仰せ。其代りには今の間
に。地つい事のすむお願ひは。拙き筆に三十一文字。文玉章の數々て。とうからお歎き申したる戀の秘密の紐傳授。

女夫に成つて教へてたべと。袂に覆ふ顔のつや。フシ紅葉を散らす如くなり。地爲氏卿打笑み給ひ。詞誠や是迄千東の水壑。地淺はかならぬ志嬉しきは盡きせねども。心にまかせぬ仔細あり。ふつゝと思ひ切り給へと。すげなき仰せに姫君は猶いやましの思ひ草。根に顯れて涙ぐみ。昇りつめたる雲の上。及ばぬ色に迷ふ身を思ひ切れとは胸慙な。東育ちの不束が御心に入らずとも。せめて一夜の御情。枕を分けて給はれとフシ袖に。縋りて宣へば。詞オ、恨みは尤々。御身が切なる誠の心。地我も寄邊にこがるれどもまゝならぬは世の有様。詞和田北條が妻争ひ。目前に知りながら。妹脊の語ひなすならば。地兩家の者が本意なき恨み。某獨りに留つて終には天下の騒ぎと成り。國の煩ひ遠かるまじ。相思ひに思はれて憎からぬ仲なれども。國家の爲にはかへられず。此世の縁は是限り。我も輪廻は殘さじと。心強くも振切つてフシ一間に。こそは入り給ふ。地ナウこれ暫しと呼びとめても。其甲斐涙にふし沈み。スエテ前後。不覺に見えけるが。地色ア、思へばあなたに無理はない。和田北條が争ひを現在知つてござるもの。ア、おつしやれいでなんとせう。兎角憎いは二人の者。自らが戀の敵。腹立ちやねたましや。とても此世で爲氏様に添ふ事はならぬわけ。いやな嫁入せうよりも。死んで未來に待つて居よ。名殘惜しやおさらばと。守刀を取出し覺悟を極め給ふ所に。立聞きたる藤澤入道。御手に縋つて。詞コリヤ何なさるゝ危いと。地もぎ取る刃物に縋り付き。いやゝ黙つて死なしたも。何樂しみに長らへん。放しやゝと泣き給ふを。詞オ、様子を聞いたがお道理ゝ。何であらうと某が。申す事に付き給はゞ。地爲氏卿と御夫婦にして進上かと抱込めば。詞オ、夫婦にさへしてたもるなら。どんな事でも詞は背かぬ。ム、しかとさうでござるぞやと。地色詞詰めて太刀一振取出し。詞中入過ぎて始まる能は紅葉狩。ワキを勤むる和田の常盛。とろゝとまどろむ時。八幡宮の神勅にて授け給ふ名劍。末社の神はお前の役。木太刀の代りにこの眞劍。惟茂の役勤むる。和田が枕元に置かしやれ。イヤゝそれは怪我の基。やつぱり木太刀がよからぞや。サア其處にこそ思案あり。かねゝ仲のよからぬ和田北條。今日のお能を幸ひ。北條は答の杖に鐵を鍛ひ。

和田を打殺す下拵へ。さるによつて此太刀を。和田へお渡しあれと。彼の諸の文句。太刀抜きかざして待つも本身。振上げて打つも鐵刀。勅使の御前にて。私の宿意を晴らす無禮者と取つて押込め。かけ構ひなく此方をずつと。爲氏卿へ嫁らす思案。お志がいとしさ故。此お世話申すナウ合點かゝと。地おのが惡事を塗付くる工と知らずそやされて。如何様邪魔な和田北條。しばらく兩家を遠慮させ。其間に嫁入りさすのとは。嬉しいやうながそれはまあ。命づくにはならぬかや。詞ハテそこには拙者がをります。越度を見付けおまへの事。思ひ切らする計略と。フシすゝめ込まれて。姫君は戀の叶ふ嬉しさに。辨へもなく太刀受取り。入道と點頭きあひ鏡の間へぞ。三重入り給ふ。地色既に其日も未の上刻はや四番目の紅葉狩。始まる知らせは棧敷の。簾卷上げて爲氏卿中央に座し給へば。シテは北條江馬の太郎大鼓荏柄の平太。女房綱手は小鼓役。笛地謡は外様とて。目通り。はなれ相詰めて紅葉狩をぞ。始めける。詠次第時雨をいそぐ紅葉狩。く深き山路を尋ねん。是は此のあたりに住む女にて候。あまり淋しき夕間ぐれ。時雨るゝ空を眺めつゝ。四方の梢もなつかしさに。實にや谷川に。風のかけたる柵は。流れもやらぬ紅葉葉を。渡らば錦中絶えんと。先づ木のもとに立寄りて。四方の梢を眺めてと。ナホスフシかたへに座せば。地色ワキの役人和田の常盛。負けじと聲も鋭げに。ウタヒシ面白や頃は長月廿日餘り。四方の木末もいろくゝに。錦を彩る夕しぐれ。濡れてや鹿のひとり啼く聲を知るべの狩場の末。げに面白き景色かな。ナホスフシ謡ひつづけて。歩み寄り。互に心よからぬシテワキ。一河の流れを汲む酒を。いかでか見捨て給ふべきと。袂に縫るもフシ居合腰。詠流石岩木にあらざれば。心弱くも立歸る。所は山路の菊の酒何かは苦しかるべきと。ナホス眼を放さぬ身構に。地在柄夫婦がフシ目くばり。地色諸も所作も半ば過ぎ。ワキは片へに居眠れば。露月まつ程の轉寢に。夢ばし覺まし給ふなよ夢ばし覺まし給ふなよ。地シテは裝束改めんとフシ樂屋にこそは入りにつれ。役目はうはの空だきか。はつと驚りし。オクリ締構姿。齊姫は末社の神。太刀提へて橋がかり。畏地他目遣ひの二かにはに見交す君も憎からず思ひ亂るゝ間の役。詞コレくゝ

惟茂。女と見えしは此山の鬼神なるぞ心を奪はれ其身を果たす事なかれと。八幡の神勅にて此御太刀を下さるゝ。我は是末社の神武氏。地あら正體なやとうゝ眠りを覺し候へ。覺まされ候へやと。常盛が枕元。フシ太刀投げ捨て、入り給ふ。和田田はむつくと起上り。話あら浅ましや我ながら。無明の酒の酔ひ心。まどろむ暇もなき内に。あらたなりける夢の告げと。江戸地太刀を小脇に掻い込んで樂屋を睨み待ちかけたり。江馬の太郎は鬼神の姿咎を振立て飛び来る勢ひ。不思議や今迄ありつる女とりどり化生の姿を顯はし。其丈。一丈の鬼神の角はかばく。眼は日月。ナホス面を向くべきフシやうぞなき。惟茂少しも騒がずして。惟茂少しも騒ぎ給はず南無や八幡大菩薩と劔を抜いて待ちかけ給へば。微塵になさんとナホス飛んでかゝるも。誠の鐵杖。和田も本身の劔の光り。ナホス地スハ事こそ在柄の平太。二人が中を押割りながら。ヤア。ハアと女房綱手も諸共に和田を隔つる鼓の手。二人は猶も撓みなく抜けつくゞりつつ手だれの達人。地勅使は棧敷に冷汗を。苦り切つたる此場の仕儀危かりける。三重次第なり。地色平太夫婦もあしらひ兼ね。詞ヤア御兩人心得ぬ振舞。法に外れし眞劍鐵刀仔細を語つて聞かされよと。地聲かけられて江馬の太郎面をかなぐり卑怯なり常盛。詞遺憾あつて討果たさば。名乗りにかけてなぜ討たぬ。狂言綺語にこと寄せ我を害せんと。企おろか。イヤア卑怯とは己が事。某を討取り姫君を娶らん爲。鐵刀にて向ふ由。先達て藤澤入道内意を以て知らせし故。最前姫の渡されし此太刀。眞劍といふ事はよく知つて用ひたりと。言はせも果てずホ、口賢き和田が一言。汝が眞劍にて能を勤むるとは。我方へ入道が内通。サア斯うしらばけに言ひ出すからは。一寸も遅されぬ。オ、己れとても其通り。イザ尋常に勝負せいと。地留めても留まらぬ二人が有様。平太夫婦も持餘し。如何はせんとと思ふ所へ。尼君の上意あり暫しとと呼ばはつて。走り出でたる城の九郎。流石の和田も北條も。上意とあるに是非もなくフシハツとばかりに平伏す。地色資國詞を改め。詞尼公の仰せ餘の儀にあらず。若氣とは言ひながら兩人共六十餘州の政務を預り。私の宿意にて討果たすなどとは。不忠とや言はん龜忽とやせん。殊に勅使の御前といひ。

甚だ尾籠の働きなり。就中木太刀を渡すべき所、眞劍を渡したる齋姫にこそ仔細あり。暫く藤澤入道に預り。きつと詮議を糾し追ての沙汰に致すべし。地色先つそれ迄は兩人共、必ずはやまる事なかれとの仰せなりと言ふ内に。藤澤入道姫君の御手を引き。我は顔にのさばり出で。詞サア二人の衆が望みの花嫁。某が預つた。抱いて寝たくば朝晩にちよこちよこととお見舞。拙者が機嫌を取り召され。地何方へなりとも此入道が。氣に入つた聲殿へ嫁入を致させる。ぎつとばりではいかぬぞとフシ憎て口。地姫は機嫌を眺めやり。別るゝ今の苦しさを言ふに岩手の里ならば。しのぶの思ひ通ぜよと。心を殘す目遣ひや歩み悩むを入道に。引立てられて是非なくも。フシ涙ながらに出て給ふ。地色爲氏様敷を下り立ち給ひ我響應の美に誇りかゝる騒動劍戟の愁ひを招く基となる。帝都の聞えも恐れあり。此事世上に沙汰無きやう。和田北條も遺恨を殘さず。實朝の輔佐肝要たるべし。鎌倉の滞留遠慮あり。我は是より都へ歸らん。尼公の手前頼み入る何れもさらばと宣ひて。しづ／＼還車の御催し。城の九郎取敢へず。詞いかやうとも御賢慮次第。コリヤ／＼平太夫婦の者。將軍尼公の御名代。見送り申せといふに隨ひ。地勅使のお供とひつ添うてフシ夫婦諸共出でて行く。地色跡に残りし和田北條。また怒り出す二人の蟲腹。詞サア勅使お立ちなされし上は誰に憚る事もなし。最前の勝負残りイザ来いやつと飛びかゝるを。地城の九郎押隔て待つた／＼。詞二人の憤り尤もながら。心得がたきは入道が心底。彼方は眞劍。此方は誠の鐵杖と。兩方へ内通せしは胸中に。一物あるに極つたり。爰をとつくと御思案あり。此争ひを某に暫くお預け下されなば。御兩所の存念を急度正し申すべし。言はゞ天下の三老職。地色近頃忽輕はづみと。事に慣れたる老人の。當座を鎮むるフシ頼智の一言。地色實に尤もと和田北條顔を見合せ。詞コリヤ常盛。資國の思慮面白し。暫く預けて此場の勝負。先へ延ばすか何と／＼。ム、其方が待つ心底ならば。一人物にも狂はれまい。必ず和田が臆病で逃げたなどと口叩くな。オ、城の九郎が抜ひを幸ひに。江馬の太郎が臆れしなど。廣言を吐き出すなと。地二人が後れぬ言葉詰め。フシ左右にわかつて控へゐる。詞ホ、數ならぬ某が。詞を立てゝ御了簡

眞以て忝し。然し今日の御祝儀。五番の番組今一番にて都合せり。地せめて狸々の切ばかり。御兩人の鼓にて。目出度う某勤めて立たん。御苦勞ながらと頼むに是非なく和田北條、不性無性に取る鼓、資國扇押開き。誰老いせぬや。薬の名をも菊の水。盃も浮び出てともに逢ふぞ嬉しき。地鼓の拍子もちぐはぐに心揃はぬ囃子方。ウタヒよも盡きじ。萬代までの竹の葉の酒。汲めども盡きず飲めども變らぬ秋の夜の盃。影も傾く入江にかれ立つ足元はよろくと。舞の間に資國は心を附ける二人が取成。得心しても氣は張弓。稍ともすれば目に角を。地立舞ふ太夫が差しあふぎ。詰合ふ中を、開き扇や舞ひ扇。天下の要は二人の勇者。家の骨なる老武者が。忠義に榮える源氏。ウタヒ盡きせぬ宿こそ目出度けれ。

第 二

地人は神の徳に従ひ來り集る鶴が岡。秋の半の中五日例年變らぬ放生會。社内に鸞を放しかけ鳩は勿論鳶雀。羽をのす國のまつり事。四海太平國豊か。五穀も實のるしるしには。畚や杓子の尼鼻も。フシ群集をなすぞ賑はしき。地商ひは世のフシ浮草や。様々に。人の後生を當てにして。罪を荷うて放し鳥酷い顔をば見せまいと。ぞめき絞りの頼冠り鸞聲のやさかたに。放し鳥雀や雀。詞やれ來たり買うたり。鳩は八幡のつかはしめ。雀は親に孝行鳥。鳶は三遍舞ひまする。買はぬは大きな殺生人。慈悲は神様。地いらぬかと。フシ突付け賣りに賣歩く。同じ世に同じ事なら商賣を。固めて見たい土細工。子供たらしの土産物事も同じく顔隠し。一荷の箱にさす初。通りを當てに廻しかけ。詞こりや誰が手車。お長殿の手車。誰がのちやい。おれがのちや。誰がのちやい俺がのちや。ヂヤゴざりませ早う。地やつとこ正面鳥居の陰。フシ荷を下して休みしが。地色人は愛想と側に立寄り。詞コレ鳥屋敷賣れまするか。去年より参りも多いが。減多に小銭放さぬぞいの。オ、テヤ買はぬ。六文の雀を二文にしても。邪見な奴

は彼方あつち向く。後生ごせい願ひは鳥賣を鬼の様に吐はきしをる。地鳥ぢどりを驚おどとしやべつても。喰氣くきでなければ賣れぬぞや。詞ことばそれいの。おれも土に付くまいと思ひ。手車と出かけて見たが。錢の廻りはよけれども。さして甘い事こともないぞいの。ヤ甘い次手ついでに此あたりに。よい酒屋はござらぬか。ヒヤこりやあり様さまはもぢりかけるのか。ハテまん直しなほに。よかる。教へてやつて相伴しやうはんせう。シテ入れ物はあるか。荷箱の内に五合徳利。茶碗は先で買つて來う。テモぬからぬの。つい此坂の下頼殿もとぞのの社の前に。坪井と云ふ暖簾のうれんの印。その隣に三升みつしうや。どちらでなりと五合してこい。地おつとまかせと荷箱の徳利口につかはる三升やへ。フシ手車賣は買ひに行く。兩都をかねし。若宮わかくさの別當阿闍梨あじかりの秘藏ひざう弟子でし。善哉丸ぜんさいまると聞えしは先將軍頼家公の妾腹よめはら。出家だうけさんと幼少より御弟子みでしとなして十一歳。お稚兒わうじ盛りの振袖や。里なつかしく鳥居の外。小鳥買はんと出て給へば同宿小僧立集り。値をして上げんとしこなし顔。詞ことばコリヤ、鳥屋。鳥召されんとお稚兒の仰せ。地是へ參れの權柄けんがらも時の旦那とはいの。フシ這ひつくばうて持出す。地色坊主ども口々に。詞ことば雀は何程。鳩は幾ら。鳶とんぼはこちらが豆腐とうふの敵。鷺の長首放してやらう。地随分負けて値を言へと。言ふもよい鳥かゝり口。物に成つたと出次第に。詞ことば先づ雀は三四の十二文鳩は八八六十四文。鷺は泥鰌どろぢを踏む故に。お足揃へて二百文。地何れなりとも放し鳥フシお召しなされと賣付ける。地色坊主ども頭を掻き。詞ことば巾着きんちやく錢では買ひにくい。何と鳥屋。今言つた鷺が踏んだ泥鰌どろぢはないか。又此鳥も放さずに。生きた奴に生醬油じやうゆ。丸燒きでは何ぼする。地遠火とほびにかけて羽たたきさせ。頭から喰うて見たいといふに鳥屋はぎよつとして。詞ことばア、こな坊様達ばんさまたちけうとい和郎。そんな酷い料理お寺ではなされうが。在家ざいけでは得致さぬ。地どうやら鷹所たしよへ來たやうなど。荷を片付けるを善哉君。詞ことば是々鳥屋。あれは皆口わやく。御坊の内は不行儀など。思うてばし給もんなと。地色大人おとなしやかに言ひなだめ今日はわしも志。一二羽放し供養くわうやうせん其鳥是へとありければ。もうとれるはと物工ものく。一荷かの鳥籠差出し。雀なりと鳩なりとお好み次第と籠の口。明けて渡せし横着わらわは。フシ皆賣付ける工たくみなり。地色若君何の心も付かず。あれか是かと差覗き。手を入れんとし給へ

ば。口より飛出る五羽六羽。是はと驚き給ふ内残らず雲井に。羽をのして。あんこ鳥の坊主達。狼狽へあせり騒げども。其甲斐もなく是非もなく。地迷惑顔に若君は。スエテ打涙ぐみお坐します。地色サアしてやつたと鳥賣は。そらさぬ顔で是は。調残らずお買ひなされて忝い。大概代物卅貫。地やつて去なして下さりませと。ねだりかけたる悪者の。氣を宥めんと若君は。調思はずも魚相して何程か氣の毒。地よきに了簡してたもと。仰せを待たずコレ。調むまい事おつしやるな。雀ばかりも百羽の上。鳩から驚から鶴も四五羽了簡してとは。エ、こりや持合せがごんせぬの。ハテナいとあれば御誂目。身に着た物腰の物。裸にして簡せう。きり。脱いておこさあれと。地物にする氣の慾面は。頬冠り迄白あげの。フシ絞り出さんと詰寄する。地色子心にも若君は無念と浮かむ目に角立て。調ヤイ賣人め。武士に向つて裸にとは。慮外者め許さぬと。地御佩刀に手をかけ給へば。オ切つて貰へば猶金と。慕ひ寄るを坊主達立隔てこりや鳥賣。調あなたは忝くも先將軍頼家公のお子。地世が世なれば天下の世繼。雜言言うて後悔すなと口々いふ程付上り。調オ、面白いそんな利郎なら猶錢金は自由な筈。地見せ付け取つて呉れうぞと。フシ腕まくり。地色隔たる同宿蹴飛ばし。立寄る所を若君こたへず拔打ちに。ちやうと切つたも小腕の肩先。ハツト飛び退く其内に。サア大事と坊主達。若君抱へ逃げ行けば事がな箇のねだり者。己れ餓飢奴一掴みと大手を擴げ一散に。フシ跡を慕うて追っかけ行く。地色かゝる騒ぎの其中へ。手車賣はぶら。茶碗片手に徳利さげ。調サア鳥屋蔵買うて來た。手の悪い隠れてかと。地尋廻つて。ハア、こりや待ちかねて去なれたさうな。損な和郎ちやと獨言。二人前をば引受けてぐんぐと言はして。フシ居る所へ。地別當阿闍梨は若君を。引つ抱へて駈來り。調こりや。若者。鳥賣奴が無體をいひかけ。此稚兒の身の難儀。暫く影を隠してくれ。地色其方男と見込んだと。いふ間に手拭後へ廻し。調ア、やくたいも無い事。男ぢやごんせぬこちや女子。地外をお頼み遊ばせと。尻込みするをヤレ情なし此お子は。調仔細有つてよしある御方。地急な場所ぢや救うてくれと。言へども聞かず。調よしでもあしでも薄でも。

麻幹を杖ちやお頼み無用。地許し給へと荷を拵へ。逃げんとするをコリヤ待てと。荷箱押へてホオ、これ究竟の隠し所。頼むく〜と無理矢理に。片荷へ若君押入れて蓋しつかりと預けたぞ。必ず見捨てゝくれるなと。言ひさしフシ阿闍梨は引返す。地ア、是坊様。無體な人ぢや知らぬぞや。箱の細工が皆崩れる。飲んだ酒も身にならぬと。狼狽へ廻る其場所へ鳥賣飛鳥の駈来る勢ひ。跡より寺僧は棒ちぎり木打て叩けとわめく聲。手車賣はきよろ〜と。徳利茶碗を放しもやらず。鳥屋殿息つきに。参らぬかとて差出す。エ面倒なと足下につけ。調ヤイ芋掘り奴等。棒の先でも動かしたら片端に蹴殺すと八方に眼をくばり。調ハレ合點のいかぬ。たつた今老達れ坊主が餓飢めを抱へ。此方へ失せたが姿も見えず。脇へは行くまい此邊りと。地見廻し〜荷箱に目をつけエ、聞えた。在家は爰ぞと駈寄る所を。流石男の手車賣。髪束掴んてはつたと蹴倒し。すつくと立つたる有様はフシ心地よりかりし風情なり。地色思ひがけなく鳥屋はきよろり。詞夢見たやうに思ひしが。ム、扱は己が隠まうて隠し置いたに極つた。地さあ渡せ渡さぬと枝骨蹴つて〜蹴放すと。飛びかゝるを寄せつけず。詞コリヤ忝くも此箱は。浦島殿より傳はつたる。お手車の玉手箱。お稚兒の命を封じ込め。阿闍梨が頼んで置れしを。あかべつとせいならぬはと。地駈来る鳥屋にしつかと組む。シヤ小賢しいと上手になり。一振り振つて跳ね倒せば。寝ながら蹴返す足車。手車賣が根限り。命限りと兩方が死身に成つて掴合ひ。是ぞ大和の蹶速と。野見の宿禰が争ひし本朝相撲の初りも。フシかくやと思ふばかりなり。地色見掛けによらぬ手車が晴れの早業向ふの霞。一跳ね跳ねて来る所を腰車に取つて投げ。起るを掴んだ髻髪。抜けよとばかりひつ据ゑて。ほつと一息つき敢へず。詞これ〜僧達。最前別當お預けの。稚兒入れ置きしはそちらの箱。地色御坊へ急いで戻して給べ。早う〜と言ふ間も待ちかね。あぶない事と教への片荷。フシ皆ひつ抱へ走り行く。地色サア是からは氣遣ひなしと。下なる相手を突放し片荷の箱を引出せば。同じく鳥屋が駈寄つて。箱を覗けば内に若君。ちやつと蓋して邊りを眺め。詞鳥屋殿。いかい御苦勞。いや御自分が。首尾がよかつた。むまい〜と。地杓通して差荷ひ。

こりや誰が手車。お大將の手車。詞誰がのぢやい。おれがのぢや。地此方のものぢやと勇み立ち館を。指してぞ三重立歸る。地候者は賢者のまぎれ物慾と戀とに緘れし。藤澤入道安靜は齋姫を預り參らせ。和田北條が確執の日々に募るを松が谷。己が館の奥御殿かしづく心に一物の。工あるこそ道ならぬ。地色お伽に付きし腰元はした。御用の透はおしきせの人事まじる色咄し。詞何と浮世は思ふ様にならぬものぢやないかいの。眞から底から爲氏様に惚れてござる姫君を。北條殿や和田殿が固い顔て女房争ひ。あなたの爲には大きな惡魔。成る相談もならぬやう。それ故か此間はぶら／＼と纏煩ひ。ひよんな事ではないかいの。そりやお道理ちやまだ其上に取交せて。荏柄の平太がお姫様に附け文。しみしたゝるい文章。返事にほつとあぐんでござる。誰がマアあた太い。地わし等がやうに不自由な身ても。女房子のある人に五尺の體の眞中を。澤山さうに法界の。フシ物にはさせぬと識り合ふ。地色折から來るは荏柄が親城の九郎資國。昔細工の堅作り乳人役の御病氣見舞。顰みし顔をにこ／＼と。玄關よりフシ直ぐ通り。詞ホ、けふはいとの機嫌がよいやら。女中方もいそ／＼と賑はしいよ。九郎めが參つたと姫君へいうておくりやれ。テモ堅くろしい毎日のお見舞に案内とは御遠慮深い。イヤ／＼さうでおりない。親しきに禮儀あり。御主人といひ殊には女儀。直ぐに通るは不禮の至り。地取次頼むとせちがふ聲。フシ洩れてや奥より齋姫。間の襖をめつきりと一目に見ゆる御やつれ。遽然に立出て給ひ。詞思はぬ人に思はれて思ふ戀路の叶はねば。地色我のみ獨り身をこがし明日をも知らぬ自らを。訪ひ慰めんと老人の行く日も來る日も憂き苦勞。よしにとばかり打恨み。フシすねさせ給ふぞ痛はしき。地色資國眉に皺を寄せ。詞思はぬ人に思はエ、聞えた。和田北條が事をお悔みか。ア、きなく／＼と埒もない。そりや何を被仰る。それを苦にしてござる故その御病氣。お心に入らねば此爺奴がどちらへもやりやませぬ。誰なりと好いた男を持たつしやれ。何誰の御意でも其處が縁づく。いやなと思ふ夫婦縁は。打みしやがれうが結ばぬものさ。が又好き合ふといふ段には格別。拙者が姪の板額女は。地幼少にて二親にはなれ孤兒と成つたる故。我娘同然に守り

育て成人して形を見れば。面はさのみ見苦しうも御座らねど。詞關相撲を見るやうな大女房。力の強いばかりが取柄。それをさあお聞きなされ。鎌倉中に隠れも無い美男。地阿佐利の與市が戀女房。然も仲がよくて當年十歳に成る市若とて。男の子迄まうけました。詞コリヤこれ互に陰陽和合致したと申すもの。お前にも十分氣に入つた殿御を持たせ。彼の和合をよくさせて。若君を見にやならぬもの。何の無理にいやな所へやりませう。丈夫にじつと落着いてござりませと。地可笑しみ交せて逆らはず機嫌とる内勝手より。詞荏荏の平太胤長殿。尼君よりの御使地。只今はへと知らすれば。詞何忤がお使に參つたとやホ、幸ひ。地色お氣晴しにわつさりと。浮世咄の輕口でも。言はせてお聞きなされませ。詞私がお傍に居ては窮屈で咄が出来まい。地色聞きや入道も留守とやら奥へ參つて歸りを待受け。年寄同士は後世咄し。詞昨日半分あて付たけ。提婆が悪の耳こすり。ずつくり言うて厭がらし。地妙藥一服用あてやろと。フシ言捨て一間に入りにつけり。地腰元どもは囁き合ひ。尼君のお使とは嘘の皮。またあなたへ何の彼のと。面憎い事ぬかすのぢやあるまいか。詞それも知れまい。どの道お逢ひなさるゝは入らぬもの。地色御氣色が悪いと平太めを勝手より追戻すが上分別。ナ申しお姫様と尋ねれば。詞いや。偽りにもせよ母様の。御用とあれば粗末にならず。地色たとへ平太が道ならぬ不義不届をいふとでも。自らが思案もある。詞みんなは何にも構やんな。爰へ通しやと宣ふ所へ。地色袴肩衣いため着け。御前かゝりの實體なる顔に似合はぬ色好み。したゝる目にて。フシ座敷へ通れば。地色何時よりいと姫君は御詞も優しげに。詞母様のお使とや。大儀ぢやづつと近う寄りや。御口上か。但しお文でも來ましたか。イヤお使は御口上。さして變つた事でも無し。此度和田新左衛門。北條の嫡男江馬の太郎。兩人よりお姫様を達つての所望。何れも天下の大老なれば。片手打ちの了簡もなり難しと。尼君にもお心を痛め給ひ。地色兎角姫が心底次第。何方へなりとも否應の御返事を。承つて參れとの仰せ。詞ナお嬉しうござりませう。ア御果報なお方ではあるはいの。方々から惚れ手は澤山。行き度い方へつゝとござれ。サア片付けて御返答。地色お聞

かせなされと自墮落まぜり。詞の角を聞きながし。詞テモ何事かと思ひしに輕骨なお使。地わしや北條へも和田へも
いや。詞左様ならば何方へ。ハテ何處へとは其方に大分。アノ惚れてゐるとおつしやる事か。地それ程よう知つてゐ
て何の尋ねに来る事があるぞいの。とは言へ我身にや綱手といふ女房あり。鎌倉では添はれまい。自らを連れ都へ立
退きや。どんな辛さも厭ひはせぬ。こつそりと二人暮し度いやいのくとしなだれて。手を取り給へば振放し。詞ハ
ハくくアてもしらくしい。取りかけて御覽じても滅多に深い所へ參らぬ。コレ姫君。爲氏殿に首だけ。いきつ
いてござるのを知るまいと思し召すか。我等に此家をそびき出させ。道からついと都の方。戀し床しい爲氏殿と。こ
つてりをやらうでの。いまあさうは得致すまい。腰元中も知つての通り。何時ぞやから千本程。進せた文の返事さへ。
一度もなされぬお前ぢやないか。それともほんぼんのお心なら。地色ちよつと手附の戀結び。後とは言はせじ只今と
抱き付くを突飛ばし。詞ヤイ畜生め。和田北條が自らを。地色妻にせんとせり合ふさへ慮外と思ひ口惜しきに。女房
子を持ちながら狀文送りて不義を言ひかけ。剩へ今の難言。とくより老中の耳にも入れ。憂目を見せる筈なれども
調親資國が忠義に免じ今日迄胸をさすりしに。地色重々の不忠者。詞そこ立つて行け穢らはしいと。地聲はしたなく走
り寄り。平太が顔を立蹴に蹴やり。紐るを蹴飛ばし睨み付け。以ての外の御氣色にて。一間に入らせ給ひければ。
つきくは口さがなく。詞お使を脇にして。とても及ばぬ色詮策。地當の槌が頬面へ。やつと參つたよい氣味のと。
フシどつと笑うて走り入る。地色平太は無念骨髓を貫くばかりの眼色にて。エ、是非もなや。不忠不義とは言ひな
がらかく面恥をかゝされ。何面目に長らへん。とても死すべき命なら戀ひこがれたる齋姫。跡に残して餘の人と肌合
せるも妬まし。和田北條も我とても。變らぬ家來の望み事。一念通さて置くべきかと。獨言して奥の間へ。オクリ窺ひ
へ行くぞ不敵なる。地色程なく旦那お歸りと下部が呼ばはる聲につれ。藤澤入道安靜邪智貪慾の鵬眼。我家の權柄の
つさのつさ。フシ肩臂張つて立歸れば。地色嫡子四郎出て向ひ。詞ホ、親人。未明よりの御他行何方へお出で。

増色城の九郎も最前より奥へ參つて待ち退屈。ちよつとお會ひなされぬか。詞ム、資國が參つたは。毎日の病氣見舞
 對面に及ばず。それにつき。地色其方に言聞かせ置く大事あり。近う／＼と小聲になり。詞某豫て天下を望み。先將
 軍頼家の馬鹿者をそゝり上げ。まんまと阿呆に實を入れさせ詰腹迄切らせしに。和田北條奴が安穩では。大望成就思ひ
 もよらず。其節とつくと工夫を廻らし。地同士戦をさせんと思ひたはけ者の頼家が使者と偽り。獨りの姫を兩人へ。成
 人の後妻にせよと。汝と某いひ入れ置きしに。詞案の如く不和と成るは工の躰おち。爰にたるみを付けまいと。今日
 も又早々より北條が館へ立越え。地色堪忍のならぬやうに毒氣を吹込み。其歸るさ和田へも寄つて同じ文談。詞近日軍
 始まるは必定。これ兩虎爭ふ時は一虎つひえに乗るといふ謀。地兩人さへ亡したら實朝殺すは手間隙要らず。ナ其時
 おことは天下の世繼。跡先に氣を付けよと。フ言ひ含むれば。詞ハ、ア連れの御智恵。如何様いやなは彼奴め等二
 人。手も濡らさず滅すとは。どうでも親は親だけの分別。地天下の世繼と成つたらば。四海を庭へ取り。富士山を築
 山。獵漁を常の樂み。是も親のお蔭ぞと。山も見えざる高くくり。フシうなづき合うて居る折から。俄に騒ぐ奥の
 騒動。腰元ども聲々に。詞荏柄の平太胤長。姫君に不義いひかけ戀の叶はぬ遺趣ばらし。御首討つて立退きしと。
 地色盲なき死骸を戸板にのせ涙ながらに昇出づれば。入道親子大きに騒ぎ。スハ一大事出来せり。此通り御所への注
 進諸大名へ觸知らせよ。詞駈付けける武士改めて。荏柄が一家とあるならば門外より追返せ。地主を殺した者の類族異
 議に及ばゝぶち殺せ。四方の門々固めよと。聲をばかりに呼ばはつて。フシ親子は奥へかけ入れれば。地家内の上下騒
 ぎ立ち琴柱よ熊手と犇めく内。近道なりと裏門より。乗込む武士は土肥の一族佐々木の何某。根井岩永兒玉黨。皆我一
 にとかけ着けて。フシ上を下へと返しけりかくと聞くより。阿佐利の與市下部にかゝせし女乗物。ぼつ立て／＼眞一
 文字に駈來り。門外にとつかと下し。十里に開く大聲にて。詞荏柄の平太胤長。齋姫を討ち奉り行方なく成つたる
 由。徒黨の者詮議の爲。評定の役人阿佐利の與市駈付けたり。早々門を開かれよと大聲聲に呼ばはる聲。地聞くと等

しく入道が嫡子四郎清親。物見の一間にをどり出て。詞ヤアならぬ。貴殿の内方板額は在柄の平太と従弟同士。主殺しの一類竹鋸の相伴人。館へ歸つて待つて居やれと。フシさも憎さげに鳴りわめく。詞オ汝等親子が性根にくるへ。さあらうと察せし故。目の前にて離別せん爲。愚妻も共に召具したり。後日の爲に見ておけと。地色やがて乗物押開き。女房是へと呼出せば。長地あいと返事はなよ竹の櫛につまりし思ひにて。打しをれてぞマシ立出づる。地色與市詞をしづめ。詞先達つて仔細語らんとは思ひしかども。館には悴市若早や十歳の子心つき。別れを悲しむ不便さ。地色思ひ圖つて様子もいはず。今聞く通り在柄が親。城の九郎は汝が伯父近き一家。それ恐るゝてはなけれども。詞評定の役儀を蒙り。一列を省かれては武士道立たず。さつぱりと縁を切り。他人と成つて平太が詮議。胸の鏡を磨く爲。暇をくれる女房。地色酷いとばし思ふなど。いひ聞かすれば板額女。顔も上げずにしくくと。フシ道理に伏す血の涙。地是非なくも手をつかへ。詞役儀に付いてのお暇と。事を分けての仰せをば無理とはさら／＼思はねども。地色かりそめならず十年に餘り子仲なした夫婦間。さつぱりと切る縁を。まあ暇やるとつい輕う。まあいふ字が後樂。上は女御お后から下は内方裏鳴迄。夫に去られ何のそのまゝよと思ふは若いとき。三十も越して母様と朝夕慕ふ子を持つて。あふぎの別れをする心。ちつとゝやつとゝ思ひやり。了簡付けても見て給べと。泣きしをるれば。詞ヤア未練千萬。市若は我子粗末にせうか。常の性根に似合はぬ練言。早く此場を立歸れ。地色暇の印と投出す一腰。はつとばかりに胸迫り。フシ前後不覺に見えにける。地色物見の上より四郎清親。大口明いて高笑ひ。詞ハアアよい仲の小靜ひ門前で味やらるゝ。土佛の内儀も大力と聞いたに違ひいかいめろ。其手で館へ入らうとはいひかないつかな。地内證の言合ひむま／＼食ふ四郎ならずと言はせも立てず。詞ヤア在柄と他人に成つたる某。地是非通さず此門一重。打破つて通るが通さぬかと。勢ひ込んで罵れば。詞オ、破らるゝなら破つて見よ。理不盡に通るなら君へ對して狼藉者。叛逆人も同然。地者ども來つて討つて取れと。呼ばはる聲に家來の大勢われ討取らんと。

フシ待ちかけたり。地色流石の與市も狼藉と。上の聞えを憚りてさうなくも寄りつかず。免やせん斯くやと身をもがき。館を睨み拳を握り。フシ詮方。もなき有様を。地色見るに堪へかね妻の板額。爰ぞ夫へ奉公と。涙拂うてすつくと立つ。去られた女房は三界に家が無ければ主もなし。誰に憚り遠慮せん。外記假令。此門磐石にて固めたりとも。夫思ひの我念力。やはか。通さて置くべきかと。飛びかゝつて門柱に餘るをひつ抱へ。えいや。えいやと。コハリ押す程に。スハ狼藉よ破らすなど。數多の家來が柱に取付き扉にひつ付き。骸を柄と。押合うたり。ナホス地女も爰を破らずば夫も我も顔汚し。一世一度の。コハリ晴業と。總身の力を兩腕に柳の腰も古木となし。揺り立つたる機門。四十五間の高舞も共に揺られてゆつさく。瓦ははらく。屋根はふはく。ナホス不破の關屋の板廊風に揉まる。フシ如くにて。地廣言吐きし四郎もあぐみ。詞ア、是々與市殿。御内方の惡あがき。足の下迄ゆさつて眼がまひさうな。是なうちつと制して下され。見ぬ振は胸慾と。地頼めど詮なく是非もなく。うんと一押し金剛力。礎土を掘返し。門も堀も一時にめりくぐわたりびつしやりと。壓しに打たれて死ぬる人。コハ叶はじと逃ぐる人。四郎も共に舌震ひ。フシ跡恐ろしと逃入れば。地色板額いそく勇み付き。是ぞ夫の機嫌直し。何でも手柄と衣紋つくろひ。いざ快うお通りあれ。道開き致せしと自慢笑顔も思ひの外。阿佐利の與市ハツタと睨め付け。詞ヤア推參なる女め。門打破つて通るなら己が力を頼むべきか。上へ對して狼藉の。共に不覺の名を取らず働き。地色言語道斷不屈き者と。叱り付けられがつくりと。どうしたら亦御機嫌に。入る事ぞいのとどうど伏し。フシ泣くより。外の事ぞなき。地折ふし奥より使の役人。詞阿佐利殿へ。城の九郎殿お會ひなされ度きとの儀。地はやお通りと聞くより與市。詞ナニ荏柄が親。地九郎が參つてゐるとな。地色それぞよき詮議の手掛り。平太が行方押へて聞かんと。白砂蹴立て一散に。フシ奥をさしてぞ。駈り行く。地色板額はつと胸迫り。資國殿は自らが伯父。姪の我夫と如何なる事か出て來らんと。案じに騒ぐ折こそあれ。入道親子が下知として門を破りし女めを。叩き伏せて生捕れと。熊手刺股長柄を力。右往左往に追つ取参

く。詞シヤレをらしき青蟲奴等。坊主憎めばけさいろく。地おのれ等迄面憎しと。取つたと寄るを右左。車返しに取つて投げ。詞又来る二人をひつ掴み。地一締め締むれば敢へなくも。フシ此世の縁は。切れにける。地色巻いて取らんと突棒の。刺股あひへ来る琴柱。詞沈んで兩手にしつかと取る。地やらじと大勢取付くを彼方をゆすり此方を振り。一振りふつて突放せば。將基倒しにやり。打碎かれて死ぬもあり。詞總がかりにと駈寄れば。地得たりと有合ふ門柱。車輪の如くに振廻しはらりと三重、難ぎ散らす。地何かは以てたまるべき。フシ皆ちりちりに逃げ行けば。地此次手に入道親子。首引抜かんと駈込むを。詞ヤレ暫らく板額と。地阿佐利の與市飛んで出て。詞汝が伯父の資國。大老中の評定極り。切腹と仰せ渡され。則ち某が介錯。最期の別れを惜しめよと。地言掛けられてハツトばかり。吐胸に涙打交り。スエテ暫し。千む折からに。地城の九郎資國は子故に料を老の身の。淺黄上下白無垢は。冥途の。旅の晴出立。野邊の草葉の露よりも。果なく消ゆる命ぞと。フシ思ひ諦め座に直る。地色阿佐利の與市腹切り刀臺に置き。詞貴方子息平太と同罪を遁れ。武士の數に入つての切腹。太刀取の某迄何程か大悦。地色心靜かに御用意と相述べれば。詞御苦勞。縁ある其許のお手に掛り。地色冥途黄泉の道に赴くは老後の思ひ出。詞只返すも面目もなき悴が積悪。主君の姫君に不義言ひかけ。御首討つて立退きしとは人生に外れし振舞ひ。地色追付け捕へられ御政法の竹鋸。心柄とは言ひながら切なき最期を遂げ居らうと。心にかゝるは是一つ。詞又二つにはあれなる板額女。幼き時孤兒と成つたるを。伯父の役と某が手鹽に掛けて育て上げ。地色貴殿の方へ嫁入させ子迄成したる甲斐も無く。飽かぬ離別の悲しみ。さぞ悔しかる本意なかる。取分け益なき女力。人の憎みも受けうかとそればかりが不便にござる。詞ヤイ板額。おぢや夫のある内は人も恐れて避けても通す。かゝらふ鳥の無き身には見侮づゝて許さぬぞ。必ず力を功に被な。十人力は百人の人數を以て叩き伏せ。地千人力は萬人の軍勢以て討つて取る。弱いに怪我は。フシ無いものぞ。地色人の用ゐるも恐るゝも今迄とは違ふぞよ。短氣に命を失ふなど。子に云聞かす親よりも。深

き御恩の有難く。せき来る涙に聲震ひ。詞誤りました今迄は。地いかいお世話に成りながら愛想らしい事も無う。お心痛める力業。今此場所でお命を助ける力もあらばこそ。君の威光の一挫ぎ。叶はぬ物は理法權。權と法とに我命。代りになして給はれと。口説き歎けば愚か。詞假令我子の業ならずと。和田北條の争ひを預り置いた某が。姫君失ひ何を以て言譯せん。地色たゞ口惜しきは此家の主。入道親子に一恨み言殘したが殘念と。奥を見遣つて牙を噛み。劍逆手に取るより早く。左の脇へざつくと突立て右へきりゝと引廻す。ハツトばかりに板額が歎きと共に阿佐利の與市。苦痛させじと後へ廻り。南無と一言すゝめの掛聲。フシ首は前にぞ落ちにける。地夫は死骸を押しかくし他所に扱ふ他人向き。辛き思ひに板額は伯父の敵は入道親子。目に物見せんと駆行くを。待てと留むる與市は忠義。上の聞えを憚りて留まるも禮儀討つも孝。二つの道に路迷ひ。出でては戻り戻りては甲斐なき跡を眺めやり。恩ある人は到極樂。無爲寂光の。故郷へ。我は夫に捨てられて定めなき世の露時雨。咽ぶ思ひを思ひやり見れば見交し。泣き隠し。フシ出づるもよしや。あしがきの隔つる中の飛鳥川水の。流れと人の身の行方。定めず別れ行。

第

三

地仁は百禍を除くといへども賞罰正しからざれば。却つて其身を害すとかや。荏柄の平太胤長が女房同じく一子公曉丸。尼將軍の館へ引取りかくまひ出し給はぬ故。實朝公の御前には藤澤入道安靜。阿佐利の與市義遠を始め其外の諸大名。晝夜を分かず相詰めてフシ評議。評定まちゝなり。武將仰出さるゝは。詞我多年の望みによつて陸奥の名所舊跡一見の爲下りし所。僅かの間に鬨がる騒動。和田北條が矛盾の沙汰。就中一人の妹齋姫を敢へなく討つて立退きし。荏柄の平太が親族を探し出して糺明を遂げ。齋姫が亡執を晴らせんと思へども。地色如何なる事にや母尼君平太めが女房。悴公曉とやらを聞まひ給ひ。御身に代へての御歎き。達つて申さば不孝と思ひ。然らば女は暫しの了

簡男子（たやすし）なれば悴ばかり。御渡し下されよと再三使を立つたれども。詞御承引（ことごしん）なく追歸（おきかへ）さるとあつて用捨致しなば。國家の政道（せいどう）狼（ろう）と成り。身に迫るは實朝一人。地かたゞいかにと以ての外心を惱まし宣へば。阿佐利の與市謹んで。詞主君を弑（ころ）せし極重惡人。如何程惜しみ給ふとて眷屬（けんりく）は遁れぬ命。幾重にも利害を説き。地御心に逆らはず。御得心にて平太が妻子御受取りなさるゝ様。御賢慮を廻（まわ）られ。フシ然るべしとぞいひ上ぐる。地色入道居丈高（にいろにゅうどうぐさか）になり。詞イヤサこれ與市。お身は主殺しの仕置（しじ）を知らずか。七從弟の末迄も残らず木の空へ上ぐるが大法。我君は親子の禮儀假令（れい）にでもアおつしやらねば。孝行の筋が見えぬ。それを傍から付込んで。地利害を説くの得心のとはへエ聞えた。詞御邊（ごへ）も大身鎧の相伴（しやうばん）が厭（いと）さに板額（いたがく）へ暇を遣はし。表向は他人となり内證で肩持つのか。地是非後奴（あつ）めらを渡されずば。尼君とて用捨はない。好みだての蟲眞口叶（むしまぐち）はぬ事ちやよしに召され。詞ヤア聞難（きこがた）し入道。地色譬へば平太が女房悴（はなむす）。樊噲項羽（はんたいきやうう）がかくまふとも。式目の法を眞先に押立て。我君の威勢をかつて受取りに。何條仔細のあるべき。詞さすれば御親子の禮儀もかけ。一つは命助けよとお頼みある。尼將軍の權威もなし。何とぞ天下の法を立て。母君の御意も立つる爲。地色利を盡してお願ひ申すそれに何ぞや以前のよしみ。縁ある故肩持つとは奇怪なる出放題（でふだだい）。今一言いって見よと。フシ色を正して決付（きまつ）くれば。詞ム、盗人猛々（はなむす）しいと。物知り顔にて云ひ並べるは要らざる詮議。左程汝が道を守らば行向つて尼君に斷立て。平太めが女房悴ナゼ受取つては歸らぬ。ペン／＼と埒（ら）が明かぬ故。此度はてつくりと此入道が秘藏息子（ひざうむすこ）。同名四郎清親（しやうしん）を受取りにやつたれば。地色追付け二人の罪人めらを宙に引つさげ戻るは必定。其時ぐわらりと胸算用違つたと映画すなど。重なる過言に堪へかね。詞オ、四郎が二人の科人を引つ提げて歸らぬ内。雜言を吐くあごた骨斬下げてくれんずと。柄に手を掛け詰寄れば。シヤ小賢しいと入道も。同じく刀ひねくつて。フシ後れを取らじと詰合うたり。地ヤレ暫くと御大將左右を顧み押しとめ給ひ。詞兩人が争ひは國を治むる政道の一助。何を何れと言ひ難し。地善惡を決するは四郎が歸つて上の事。必ず／＼早まるなと御詞も終らぬ所

へ。藤澤四郎清親面真赤いに血まぶれ。這ふくにて立歸れば。びつくりしながら父の入道。詞ホ、四郎早かつた。嘸ぞ汝が武勇に恐れ。早速科人渡されたであらうがな。但しは手痛く働いて受取りしかと問ひ掛けられ。テモ扱もよんな所へ酷たらしいお使。何が尼君の御館御門前には板額女。其すさまじさは金毘羅の荒れたる様に立ちはだかり。地色道理を分けて言ふ間もなく片つ端から投散らし。寄付かるゝ事ならず。詞私も爰ぞと存じ働いても見たれども。中々及び絶えた事。少々疵を付けられても。骸を無事に持つて戻るが手柄と思ひ。天の命を耳二つでやうくの扱ひ。あぶない目に遭ひましたと。地色がれし耳を兩手に抱へ。フシ泣顔してぞ入りにける。地色與市は氣味よくオ、命は大事のもの。耳の二つや三つでは代へ徳な拾ひ物。天晴れ入道の子息程ある。御發明くと。嘲哂せられて言句も出でず。始めの自慢もしよげになりフシぶつゝき顔を振廻す。實朝くわつと御色變り。詞エ、情なき母君や。佛を學ぶ難髪の御身。姿を變へし世を捨人。慈悲專らにし給ふとて。現在我子の敵と言ひ。地色圭を殺せし大悪人の悴。渡し給はぬのみならず使の者にかゝる狼藉。詞六十餘州の主となる實朝が仕置始め。妨げをなし給ふ母上こそ恨めしけれ。地此上は不孝の名を取り御心に背くとも。某直きに馳向ひ二人の奴輩引つ立て歸らん。馬に鞍置け武士ども用意せよと言ひさして。御座を立たんとし給へばヤレ待ち給へ申上げたき旨ありと。聲をかけてお次より。因幡の守大江の廣元いうく歩み出で。詞御憤り御尤には存ずれども。是しきに君のお馬を出し給ふは鷄を裂くに牛の刀を用ゆる同然。世の人口も如何なりさりながら。尼君にも斯程惜しませ給ふ上。今更容易く御渡しもあるまじ。地色よつて某諸大名に觸をなし軍勢を催したり。短兵急に取奔がせ荏柄が悴を受取るべし。御心安く思し召せと事もなげに言上ある。地色阿佐利の與市膝立直し。詞コハ廣元の詞とも覺えず。軍兵を以て受取らば多勢を集める迄もなく。某一人立越えてもいと易き事ながら。禮と不孝の大敵に手向ひならず是迄延引。地然るになんぞや仰々しく。諸軍へ觸をなしたるとは心得ぬ振舞。近頃粗忽千萬と。言ひも切らせず、尤もの咎めながら。詞譬へ尼公の御心に背けばと

て。天下の掟を亂しなば一天四海の笑ひ草。先祖へ對して不孝の一つ。一度怒り給ふとも。地色賞爵正しき明君と萬民こそつて尊敬なさば尼君共に御譽れ。詞爰を以て某が思案を込めて集めし軍勢。御白洲に招き入れ君の高覽に入るべきぞ。地色共に見物せられよと立上つて大膽上げ。詞申し付けたる諸軍勢隊伍を亂さず御前に相詰め。一々家名を名乗られよと。地呼ばゝる聲と諸共に。ハツト答へて乗出す。オクリゆゝしへかりける。コハリ次第なり。

軍勢玉の小櫻

ナホスまづ一番に進みたる。印は名におふ四ツ目結。三所結ひの振分髪小櫻威の胸丸を。花やかに出立てて姿相應のコハリ挑花駒に。武者振氣高く跨りしは。如何なる人の嫡子ぞや。地さん候親伯父は。藤戸の海を渡したる稀武士の八十氏川。早瀬を分くる名馬の蹄サツサ。フシ佐々木が末子綱若。親の手柄を羨みて。ナホス明暮れ濱邊の水遊び。水練浮足立泳ぎ。五尺の堀は一足飛び。九尺の高塀ひら／＼。ひらりと乗つたる手斧がけ。燕の羽返し宙返り將又。楊弓。雀小弓山鳥の尾の長口上。舌も廻らぬ先陣役。駒を控へてフシ乗据をたり。第二番に打つたるは。でん／＼太鼓の指物に。絹糸織しの鎧を着し。金覆輪の乗鞍は。オクリ花なら。へねども芳しき。鶯の巢にほとぎす。武士の鵜鳥と問はずして。土肥の子息の實千代ならん。フシ實によく御覽あるものかな。しやが父に似て母に似ず。藍より出て愛のなき。姿形は生れ付。書物一冊讀まねども。乳人が教へ聞覚え。鳥はかう／＼鼠はちう／＼。忠義に捨つる一命は何の一分五厘ぢやと。算用知らぬ高くくり。小耳に狭む鬢の髪。小意氣過ぎたる蜻蛉頭。フシ振廻してぞ。歩ませたり。コハリ次は鎧も一様に。ナホス若紫は春日の里。かいま見したる豆子供印も豆藏風車。兄は十歳。弟は。なな里僧む胸伯盛。人に負けじとフシ乗込む姿。詞ハテやさしやな何人の。二葉の種ぞ名乗はいかに。イヤ。二葉より生ひ出でし。千葉の資若。胤君とて。地戰は今日の手ならひ罌。草子よごしの兄弟が。後陣の數に入る事は。如何

なる所以としら墨や。しやらくさ墨に候と。兄が進めば弟は。乗り後れじと聲高々。先へ行くのは酒屋のお方。跡にさがるは狼狐。虎の威を借るとりなりは。フシ不敵にも亦しをらしき。扱また跡なる旗さし物。巴色どるぶりく太鼓。江戸宇都の宮の岩松とて年も八歳口松者。ナホス餓飢も人数としやばり出る手相撲。首びき目無しどち。隠れん坊を仕嵩じて。敵の闕へも忍びの達者。なんぼの潜り難い潜り戸もくぐりく潜つたが此處のくぐり戸は今くぐりくぐり始めぢや。フシ山の大將。我なりと中にも目立つて。見えにける。其外佐藤竹の下。相馬の子供が印は竹馬。毬杖破魔弓。矢繼早。父の武功を的にして。まつかう肩骨フシ打出の小槌。詞當つて當つて頭やく。フシ思ひの旗さし物。御譜代外様の分ちなく。十一以下の軍勢ぞろへ。徒歩武者。馬武者きらめいて。照る日に輝く物具は。黄金花咲く陸奥山。五色の母衣が入れ亂れ。空さへ匂ふ花紅葉吉野。高雄の春秋を。一度にうつすお書院さき。廣庭狹しと乗廻し四府の賢陣魚鱗の備へ。孔明が曾孫太公が。鶴の孫とも見るばかりフシいさましく。又愛らし。地色實朝烏帽子を傾け給ひ。調數度の使を承引あらず。殊に四郎清親だに言ひ甲斐なく追返され。地恥辱を取りしは目前なるに。かゝる小兒のたはむれ言。彼等を使に平太が悴。心安く受取るとは。廣元所存あつてかと仰せにはつと頭を下げ。詞最早與市申さるゝ通り鎌倉の諸歴々。武勇を以て奪ひ取るは。掌を返すよりいと易き事なれども。打破られぬは孝心の道。御親子不和になり給ふは如何ばかり歎かはしく。取つ置いつ工夫を廻らし。地頑是もなき童ども。此如く甲冑を帶し。御館へ押寄せば正しく弓を引くにはあらず。只一筋に國家の掟。糺さん爲の討手のまなびと御孝心を感じ給ひ。詞平太が悴を事故なく御渡しもやと存ずる手段。地忠義を守る廣元が寸志の智略に候と。理を糺したる一言に。君を始め伺公の面々。フシアツトばかりに感心ある。地色與市は暫し答へもなく子供の中を打眺めて居たりしが。詞驚き入つたる御計略膽に銘じて詞なししかし一ツの不審あり。かく諸大名の子息達獨りも残らぬ初陣に。某が悴市若ばかり見え申さず。地何故加へ給はらずや。御心底にまかせざる仔細ばしあつての儀か。詞されば。尤も其元

御内室を縁を切り。他人と成つてはござれども。御子息とは血筋の一家。拙者が計らひにも成り難し。地君へ伺ひ兎も角も御差圖にまかされよと。言ひも果てぬに藤澤入道。ヤア尋ねに及ばずそりやならぬ。詞女房去つたは世間の見せかけ。内證ではこつてりと訪れをして樂しむやら。誰も番には附いて居ず。何を證據に他人呼ばはり。此方から勸めうとも遠慮すべき筈の所。地色恠を此人數へ入れたいとは。猶物臭うて吞込まぬと。言ひほぐせば大將暫らく御思案あり。詞入道が詞理に當つて道に背く。君臣の禮は左にあらず。地色忠義には親を捨て。兄弟妻子の恩愛を忘るゝが臣下の習ひ。縁あらば一入に非儀を正すが弓矢の作法望みに任せ與市が恠後陣の大將と定むべし。詞さりながら他人の子供千人より一大事の討手なるぞ。地幼なりとて仕損ぜば共に通れぬ世の人口。よく言ひ聞かせて出陣させよと。御座を立て入り給へば。地色與市は面目世に施し。勇んで御前をたつか弓引けば返さじ武士の彌猛心や廣元は。つゝ立上つて諸軍に下知。さあ／＼何れも先陣後陣の備へを立て。列を崩さず出陣あれ。早やとく／＼とフセリ立つれば。地畏つたと乗出す。げにも勇者の實生とて花の蕾や梅檀の。フシ二葉の榮えかんばしき。紅梅色の手綱を掻繰り／＼。轡の音はちり／＼りん。障泥はぼんはか。蹄はしと／＼一連れに勇み進んで三重押寄する。地至つて用捨は御身にかゝり。御親子不和の基ぞと。諫め申せど尼君は荏柄が妻子を隠まひ給ひ。物見の亭を高やぐら。門々固め實朝の。討手來らば討死と思ひ定めし御覺悟。フシ底意如何にと訝かしき。地色夜の目も合はぬ腰元仲間一ツ所に集りて。詞なんと思やる皆の衆。荏柄の妻子を受取らんと。數多の軍勢向ふといふぞや。日頃習ひし軍法の奥の手。地色命限りに逃退かうてはあるまいか。名ある武士と引組もより。可愛い男と引組んで。死ぬる戦がして見たいとそゝり出せば。詞才嗜みや。敵に後を見せるのは。女の身ては大きな不作法。殊に味方に板額女。子迄産んだ大根強。地五萬や七萬のお敵は明家て棒。願て蠅。つい拜ますとしどもなき。咄し半ばへ荏柄が女房。綱手と言へど便りなき。落目に成つて氣もひがみ。詞コレ何れも。板額女ばかりを力にし。軍せうとはあぶない思案。地色めい／＼命

を的^{まと}にかけ討死せうとは思はずか。笑止な衆と蔑^{あさま}したる詞憎しと板額女。物見を出てて詞ホオ、勇ましき綱手殿のお詞。左程のそもじが何故に。子迄引連れて尼君を。頼んでさもしい命乞ひ。實朝公は親御へ對し御祝ひもなされかね女房は兎も角も。一子公曉は姫を殺した者の悴。首討つてお渡しとの仰せ。達つてあるならぬとある。仰合せて此騒動。地誠口程健氣なら公曉を刺殺し。其身も自害したがよい。兎角命は惜しいものと恥しめられてイヤコレ。詞死ぬるを厭はぬ證據には。幾度かお暇を申し上げてもお上には。我娘を殺したる荏柄こそ科人なれ。其方親子は知らぬ事。地色隠まひしには思案ありと奥深い御一言。死ぬるにも死なれずと言はせも立てず。詞其言譯暗い。今にも討手攻めかけなば。奥深い御思案があると言うて事済むか。ハテ其時は覺悟の前。サア其覺悟を今極め。一子公曉が首討つて御親子の中を丸うしや。イヤそれは。ソレハとは卑怯者と。地色角目かなめの競合が。漏れてや奥よりお局かけ出て。尼君様の上意なり。詞板額様は表を固め。夜廻り厳しく言付け給へ。地綱手様は先づ奥へと。言ふを幸ひよき折と。フシ皆引連れて入る影を。本意なげに打眺め。餘り上が慈悲過ぎて。天下の騒ぎとフシなる事よと。獨り恨みて居る所に。間近く聞ゆる人馬の音。列を構はぬ軍勢の鉦も太鼓も一時に鯨波をどつとぞ上げにける。地色すはや夜討と板額女。物見に上る其内に。松明提灯星の如く。先に進むは佐々木の末子綱若丸。土肥の實千代。二陣は千葉の資若胤若。蜻蛉頭も打交り。十一以下の子供の聲々。荏柄が一子公曉が。首取りに來た爰明けよ。明けぬは卑怯弱者よ。此方が怖いからわあ。フシ笑へ／＼と罵しつたり。地色板額自然と心付き。天下の法と御親子の禮儀の程を思召し。子供を以て敵對か。實に尤もと感心し。定めて我子の市若も人數に加はり居るべしと。明りにすかし差覗き。あれか是かと見廻せど。似た姿なき不思議さに。物見より聲をかけ。詞コレ／＼子供衆物問う。阿佐利の與市の一子市若と言ふ子。地色其中に居るならば一寸呼出して下されと。頼めば先なる佐々木の綱若。詞其市若はおれと友達。來しなに誘ひにやつたれど。いやと言うて見えなんだと。地言ふに側から口々に。おいらも誘ひに寄つたれ

ど。詞軍は怖い物ぢや故。跡から行かうの留守ぢやのと。尻込みして得おぢやらぬ。地あんな腰抜け今からは。友達仲間へ入れまいと。譏る我子の噂をば。聞く親の身は胸せまり スエテ暫し詞も無かりしが。詞いやなう子供衆。總體夜討といふものは。人の寝込みへ押寄せて。騙して討つ故卑怯戰。地色それを知つて市若が來ぬであらうと紛らかし。其方衆も手柄したくば明日夜が明け。詞いつもの飯食ふ時分に皆ござれ。其時小母が取持つて手柄さしてやろ程に。地今夜は去んで寝えしやと。我子の來ぬが不思議さに。當てなき事を引延ばす。フシ思ひは親の因果かや。地色寄手は何の差別なく。夜する戰が卑怯なら。詞明日夜が明けると其まゝ來う。其時手柄さしてやと。地先が頼めば其次が。小母様手柄をわしにもや。イヤおれにもと段々に。競合ふ頼み頑ぢよなく。鉦や太鼓を叩き立てフシ一先づ陣を引きにける。地色板額跡を打眺め。小母でなき身を小母にして。手柄頼むに市若は何として來ぬ事ぞ。假令我子は臆病でも。父が勵ましおこす筈。持病の蟲でも起りしか。母の無い子と甘やかし。養ひ過して病は出ぬか。心えなや氣遣ひと顔見ぬ内の物思ひ。案じに障子押立て、オクリ暫らくへ時をフシ移す内。江戸地程なく一子市若丸。十一歳の初陣に。着たる鎧は錦草。鉢形打つたる。兜を着し。ナホス地弓矢手挟み門前に大聲上げ。詞阿佐利の與市が一子市若丸。公颯が首受取らんと。拔駈けしたる證據の一矢。地是を戰の血祭りと。よつ引きひやうど門柱に。三寸ばかり射込みしはフシ健氣に。亦又しをらし。地色我子と聞くより板額女門押開き飛んで出て。詞ヤレ市若おぢやつたか。待兼ねましたほんにまあ。地よう來たこと事ぢやと嬉しさも。そゝろになれば市若も。詞母様久しう逢はぬ故。地逢ひたかつたと取纏る。詞オ、逢ひ度い筈道理々々。地色自らも別れてより片時忘るゝ事もなう。最前友達衆に尋ねたら。詞軍は嫌ひの逃げてのと。地色惡口聞くに猶の事。しかう案じてゐました。まあ何として遅かつた。詞ざればいの胸々へは觸があり。私は父様がお下りなされ。其方には公颯が首取る役。天晴れ手柄して來いとくれんぐの言付け。地私にばかり手柄さし。名を上げさせて下されと。身勝手言ふに打ち黙頭き。詞オ、よう言やつた。其方

に手柄させいで誰にささう。フムウ流石母が産んだ子。阿佐利殿の胤程ある。地心なら武者振りなら此様凛々しい子があらうか。詞をしてまあ此鎧。誰が物好きて誰が着せた。兜を猪首に着せたのは。地父様であらうがのと押廻しねち廻し。詞コレ市若。何故兜の忍びの緒結んでおきやらぬ。地解けてあるがと氣を付くれば。詞いや是は母様に逢うたらば。結んで貰へと父様の言付け。何自らに結んで貰へとか。ハア聞えた。一旦武士の義理に迫り。夫婦の縁は切つたれども。人知れず思ひ暮す。折あらば忍べ。忍びの思ひの糸。結べ結ぶと言ふ心デエ。地結んでやりましよと。縁起祝うてしつかりと。結ぶ拍子に忍びの緒。ふつゝと切れて落ちたるは。フシ心ありげに見えにけり。地はつと思ひし母親より。市若猶も氣にかけて。詞申し母様。軍に立つて討死する者。忍びの緒を切るとある。わしや討死をするのかや。爰へ死に來たのかと。地おろ／＼涙を打消して。詞オこな子はけうとい。其様氣にかゝる事言はぬもの。高の知れた荏柄が悴。ひねり殺せばとて苦の無い事。主を殺した者の子。遅かれ疾かれ遁れぬ命。尼君へ申し上げ其方に首を討たしてやらう。地色紐も母が付け直し丈夫にしてやりませう。此方へござれと手を引いて門内さして入る海の。浪の哀れや打紐の。切れしを後の思ひとも。知らて親子は勇み立ち。オクリ伴ひ。べ一間にフシ入りにける。子を捨つる簀はあれども身を捨つる。簀は無しとの。フシ世の譬へ。身につまされて。阿佐利の與市。市若を討手とは。深き所存も有明の。ステ月も心も搔蟬る。思ひの糸に惹かされて。フシ門前。近く來りしが。地色跡先見廻し館を眺め。あれが物見。是がお座敷。内の首尾を窺ふは。丁度此ずん此邊と。塀の側に身を寄せて。フシ耳を澄ます折からに。地色尼君荏柄が妻子を引連れ。表間近く出て給へば。よき幸ひと板額女。一間を出てて手を仕へ。詞實朝公より討手と申すは。十一以下の子供の軍勢。これ孝心の道を立て給ふ我君のお心。それに敵對公卿をお渡しないは。あんまり親御がひの我儘。急ぎ首討つてお渡しあらば。法も立ち道も立つ。地色双方のお心休め。私にお任せ下されと。貰ひ掛けたる心根は。フシ子にさす手柄の種なりし。地色尼君御目に涙を浮べ。詞其方の夫阿佐利の與市。仔細なん

にも言はぬよの。一旦の口止を用ひ。連添ふ者にも語らぬとは天晴れの侍。地色斯くなるからは何を隠さう。あの公曉は在柄の平太が倅とは偽り。詞誠は先將軍頼家の一子善哉丸。エ。そりやお妾腹に出来たお子。オイノ。自らが心のさもしさ聞いて給も。出家にするとして乳母諸共。鶴が岡の別當へ預け置きたれども。實朝に子のない故。地色若しもの時は跡目にもと。思ひ付いたが此子の因果。人の譏りを憚り。詞其方の連合ひ與市と。綱手の夫平太とを頼み。密かに奪ひ取つては貰うたれども。地別當の尋ねもきびしく。當座凌ぎと在柄に預け。平太夫婦の子と言はして今の難儀。其譯言はば尼の身で。出家落した天罰と。言はれんも恥かしく。共に自害と覺悟する。心の内の悲しさを。推量しやとしやくり上げかこち給へば綱手も共に。我子ならば何故に是迄助け置きませう。疑ひ晴れて給はれと。言譯聞いて板額が。胸はがつくり繰返し。詞あの申しそんなら。夫阿佐利の與市。公曉は頼家のお胤といふ事。知つてゐるとも。與市は手車賣とやらに成り。平太は鳥賣。箱に入れて戻つてたもつた。ホイ。ハ。地はつとばかりに板額は。夫が懸けておこしたる。忍びの糸の判じ物。フシ解けて胸をば苦しめり。地色與市も表に打ちしをれ。さぞ女房が何かの事。思ひ合はさば胸迫り。我を恨まん。不便やとフシ聲を。立てずの忍び泣き。地公曉君はおとなしく。詞我命終るは厭はねども。共にとあるば、様のお命が助け度い。地よきに頼むと一言が。身にも應へる其上に。尼君近く立寄り給ひ。人は五十を定命と。言ふに六十を越しながら。地色一人の孫を先立てば。何長らへん夜明け迄最期の念佛それ迄に。此子が助かる筋あらば。尼が命は終るとも。助けてたも板額と。くれぐれ重き重荷をば。フシ仰せいなとも言ひかぬる。地詞の内に若君や。綱手引連れくしをと。佛間を指して入り給ふ。フシ御心根ぞ痛はしき。地仰に残りし板額が。涙の顔を振上げて。ナウ聞えぬぞや我夫。公曉を頼家のお胤といふ事知つてなら。何故打明けては下されぬ。可哀さうに市若を。討手と言うて賺し越し。忍びの緒を切りかけて。母に結んで貰へとは。私に切れとの事なるか。お身代りといふ事を。蟲が知らして其時に。詞母様わしは討死を。するのかいのと氣にかけし。

今思へば神の告げ。地つけとも知らず餘所の子の。花々しきを見るにつけ。此市若は何故遅い。來さうなものと死ぬる子を。待兼ねたのは何事ぞ。殺しにおこすと知つたらば。待つまいものをと。しやくり上げ。歎けば夫は塀の外。調忠義ならずば何故に。願ひ好んでおこさうぞ。父様手柄をして來うと。勇み進んで出た時の。俺が心を推量せよ。せめてま一度逢ひたさに。地忍んで來たと仲上り。足爪立つても高塀に。隔つ思ひはいとゞ猶フシ涙くり。出すばかりなり。地色市若斯くと知らばこそ。一間をそろ／＼忍び出で。調申し母様。よき左右あるかと最前から。待つて居れども音もせず。友達衆が來ぬ内に。地手柄をさして父様に。褒めさして下されと。殺すと知らぬあどなさを。見るに母親せき上す。涙を忠義に思ひかへ。詞成程々々。末代に名を残す。大きな手柄させませう。イヤナウ市若。武士の子は何時知れず。もしやまあ其方が。平太が子の公曉で。君より討手が來りなば。どうせうと思やるぞ。ハテそれは知れた事。主を殺した者の子と。指差しに會はうより。潔よう腹切つて。洗石は武士と言はるゝ氣。アノ腹切つてか。アイ。アノ腹をや。地腹をと言ふにしやくり出す。涙を吞込み。吞込みて。フシ顔打眺め。詞オ、そなたならさうあらう。其ゆゝしい心から。手柄がしたいは道理々々。さりながら此姿では。公曉が油斷せず。鎧も脱ぎ常の姿。地色あの一間に隠れゐて。母が詞を掛けたらば父の心に叶ふ手柄。長地して見しややいのと鎧の紐。フシ解くも涙に結ばれ死出の。晴着の。錦革。脱がせば下に白無垢を。着せて越したは胸慾な。酷い夫と恨みをば。來てなく夫は塀の外。我は忠義の男氣も。まさかの時は得討つまい。強い女ぢや討つさうな。殺すさうなと飛上り。見付けの石へ駈上り。塀に手をかけ羽あらば。飛んで入りたや顔見たやと。覺悟の上の覺悟にも。フシこたへ兼ねたるばかりなり。地色板額涙の聲かくし。地コレ市若。最前もいふ如く。あの一間に忍び居て。假令どの様な事あつても。呼出す迄は出やんなや。手柄さして父様は愚か。鎌倉中の侍に。鑑と言はして褒めささう。地母に任しやと押入れて。立切る一間を最期場と。諦めかねし涙の袖。絞りながらに邊りなる。フシ燈し火消して廻りしを。地色尼君綱手は若君を後に圍ひ腰

刀。己れ我子を引入れて。手柄さそとは心得ずと。身を固めたる女の一圖。外には與市が内の音。静まつたるに不思議たて。耳聳立てし四方八方。板額そろ／＼暗がり。足音隠し表の方。板間を強くぐわた／＼。人來る音に踏鳴らしそろ／＼と戻つて一間の側。さあらぬ體にて聲に角立て。調誰ぢや。それへ見えしは何者ぢや。何ぢや荏柄の平太とや。シヤア。正しく汝姫君の敵。地遁さぬやらぬと立上り。何を目當かッ詰掛くる。地色尼君綱手は誠かと。差覗けども人影の。無いとは知らず市若が。一間の内に聞く耳の。外には與市身拵へッしいづれも。様子を窺へば。地色猶も詞を逆立てて。調何んといふ平太。此板額に密かに言ふ事がある。オ聞かう。サアどうぢや。ヤ。ヤ。ヤア何といふ。あの市若を取返しに來た。そりやならぬ。尤も其方が子なれども。藥の上からわしが貰ひ。與市殿と二人して。育て上げた此方の者。今に成つて戻せとは。アレまだしつこい。これ／＼。此方は現在主殺し。その主殺しの子と言ふとのコレ。市若は腹を切らねばならぬはいの。最前も公曉と。打替つたらどうするぞと問ふたれば。潔よう腹切つて。流石は武士と言はるゝと言うたぞや。二人の親に褒められうと思ひ死ぬるは定。可哀さうに取返さずと置いて下され。あれまだ一間を目掛ける氣相。何ぢや踏込み取返す。サア取返して見よ。イヤどこへイヤならぬ。地どつこいさうはと一人して。二人の物音足音を。與市は女が手にかけて。討つに討たれず腹切らす。計よと推しても。尼君綱手は不思議さに。心を配る一間には。不便や市若う／＼と。扱は我身は主殺しの。荏柄の平太が子なるとや。淺ましや悲しやと。立つては泣き居ては泣き。詮方もなく座を占めて。南無阿彌陀佛と善添を。抜くより早く脇腹へ。ぐつと刺せばばつと散る。障子に映る血煙を。見るより母は狂氣の如く。ヤレ腹切つたか出來したと。駈寄る音に阿佐利も半亂。尼君綱手もコハ如何にと。若君燈し火振上げて。見れば敢なや市若が。切なき息をほつとつき。調ナウ母様。今まで私はほんの子と。思うて居たがよう聞けば。荏柄殿の子なる由。主を殺した者の子が。助からうやうなしと。潔う死にまする。手柄もせず死にをつたと。父様がお叱りなら。よう託言をして下され假令荏柄

の子である。やつぱりお前や與市様を。親と申うてゐる程に。子ぢやと思つて一遍の。地御回向頼み上げますと。言ふに母親張裂く思ひ。ヤレ其方をば父上が。手柄せよとて越されしは。公曉様は先將軍のお子。お身替りに立てよとの。心を籠めし忍びの緒。地色切るに切られず討ちかねて。獨り死んで貰ひたさ。何の荏柄の子であるぞ。與市殿と我仲の。ほんのほんぼの本の子ぢや。詞其方一人が死ぬるとの。尼君様や若君のお命の替り。手柄も手柄大きな手柄。潔う死んでたも。地何の因果で武士の。子とは生れ來た事ぞと。口説き歎けば表には。詞市若父も來てゐるぞ。臨終正念南無阿彌陀と。地色唱ふる心通じてや。今際に成つて目を開き。詞そんなら荏柄の子でもなく。死ぬるも手柄になりますか。地嬉しうござる母様。さらばでござると敢なくも。息引取れば表も内も。思はずわつと泣倒れスエテ前後。フシ不覺の涙なり。地かゝる哀れも我夫の。惡事よりと綱手は覺悟。座を占め自害と見えければ。尼君やがて双物振ぎ取り。詞汝誠の心あらば。夫荏柄が行方を尋ね。姫が敵を討つて得させよ。市若への追善には。我愛着の心を放れ。再び公曉出家させ。地色後世弔はせんと若君の。御誓を押し切り給ひ。綱手に従ひ此家を立退き。如何なる僧をも師と頼めと。見放し給ふ若君は。成人の後公曉の讀みを。其儘聲に變へ。公曉法師と名乗りしは。フシ此幼子の事なりし。地色夜もはや過ぎて明方の。又も寄せ來る鯨波の聲。板額は非なく涙ながら。死骸の首を打落し。悲しさ隠し聲張上げ。詞尼君隠まひ給ひたる荏柄が。一子。公曉が首討つてお渡し申す。受取人はお通りと。地色大門開けば阿佐利の與市。爰ぞと涙押拂ひ。詞おいしくも致されたり。則ち是に市若丸。受取る役に控へたりと。地我子の名をば名乗るも追善。尼君不便と同向の唱名。供養は若君法の旅。綱手諸共館をば出づるも思ひ見る思ひ。親と親とは式法に。我子の首を受取り渡し。詞いかい御苦勞。御苦勞の聲も涙に震ひ出し。わつと泣けばははつと。地禮儀に隠す涙の袖。縫れば拂ふ愛別離苦。會者定離ぞと振切つて是非なくも引別れ御館を。指して立歸る。

第 四 道 行 こがれ松蟲

六部念佛南無阿彌陀ア。南無阿彌陀ア。南無。阿。彌陀ア。阿彌陀ア。ナホス幾度か。物思ふフシ袖に。訪れて。涙にあかぬ秋の風。スエ便りも聞かず文も見ぬ。荏柄が妻の綱手こそ。小オクリ絶えぬ。妹背に繋がる、修行公崎も旅衣。本フシ六十六部に身をなして。後には笈前に鉦。右に撞木の現とも。夢とも知らぬ世のさがに。長地お主を討ちし我夫は廣き世界にがどみ鳥我は浮世を放れ鳥。比翼争ふ北條や。和田が妬みのとりくに。フシ定め兼ねたる境川。鎌倉山の山かづら。未だ夜を續めて落ちて行く。フシオクリ心のへ内こそ。便りなきフシ世を白雲に。數見えて。田の面に落つる雁の聲稻葉もそよと訪れに。人目忍ぶの。唄我がな。みだには。乾く間もなき袂の浦も。引かば靡きやれさりとは。ナホス何時かは君を都べの萩の下葉の。露になりとも。フシ濡れてなりとも。と萩吹く風の。便りをも聞くやと招く旗薄。尾花が末の思ひ草。兎やせん角や千貫樋水の。流れと身の上と一方ならぬ二枚橋。かけて情は。時知らぬ富士の。山こそ我身の上よ。煙比べん袖しの浦。戀と浮瀬の鳴渡ゆく。瀬戸の染飯言ひかねて目元ばかりに。泣く子坂。小夜の。中山中々に。スエ愛しい子にも鹽見坂。杖つきの里とぼくともひ舞坂に立止まり。疲れ紛らす道草の。フシ木の實拾うて在します。地綱手はつくく打守り。ア、定めなの世の中や。大山は淵となり江河は岡と變るとも。先將軍の若君と呼ばれ給はん御身をさて。浅ましの有様やと。せき来る胸を。フシ押鎮め。アレ／＼日脚も暮近し。人里遠き此野邊は熊狼の恐れあり。いざさせ給へと手を取れど。詞愚かな事を言ふ人かな。地父上此世に在まざば熊狼も我家來。怖くば其方先へ行きや。おれは爰にと横田川。フシ横車こそわりなけれ。地やる方もなく憂きふしに。三下り唄別れ。別れと異なる事ばかり。言うて私に苦にさすのかえ。よい／＼仕様ぢやの。ナホスそんなら捨てて行くぞえと。威せば流石稚氣に堪へて給もとかいつくり。馬を綱手ははた／＼と。勇み賺して拍子とり。狂言諷扱

も扱も此方は。いたいけな事言うた。足が痛くと北嵯峨へござれの北嵯峨へござらば。三度笠をしやんと被てお伴するが面白い。吉野初瀬の花よりも紅葉よりも。戀しき人は見たいものぢや。所々お無理なしに疾くござれ。しんどかいちやが負ひませう。ナホス箒も背中に。懸帶の結ぶ縁を松の尾や。此處に北嵯峨西嵯峨を尋ね。尋ねて二親に。逢ふ坂越えて身の上を。言うて夫にあはた山。逢はゞ日頃の憂き辛氣三條口。にぞ三重へ着きにける。

鉢タ、キ憂き辛さ。何れ劣らぬ世の中に。地蔵輕哀れはかなき我等かな知らずはさても止みぬべき。業に引かるゝ魂魄を導き給へ地藏尊。ナホス厨子にぶらりと鶴が岡。地別當阿闍梨は先將軍頼家卿より預りし。善哉丸を奪取られ去年の秋より方々と。何處を先途に。フシ雲掴む若しは變化か人賣りかと。丹波の山の奥よりも。丹波の湊ゆらゝと。オクリ尋ねて都縦横に。オン小嶋が崎より寄りかける觀世小経の地藏尊。長地くみ上る内彼若に廻り逢はんの大願も半過ぐれど栗田口。往來の人に勸進を。フシ請うて。暫しは休らひぬ。地色直ぐなる御代にねぢけ者。藤澤が郎等根來伴藏供人引具し駈來り。蚤取眼で數から棒。詞コリヤ／＼願人。在柄が女房悴を連れ。此街道へ来る由跡の宿で聞いて來た。地色見たらば知らせと氣を急ぐ顔色。詞ハレとても無い滅相なお尋ね。在柄は知らぬが麻柄なら。そんじよ其處等と聖靈の荷持を頼んで問ひ給へ。地我等は地藏を建立の大行者。フシ勸進寄進とすめける。詞オ、是は誤つた尋ねる女の年頃は三十内外。むつちりと太肉色白な女房。捕へて手柄にせにやならぬ。地其行方が聞きたいと言ふに黙頭き。詞エ、それで聞えた。扱は人の女房を追駈けて。煩惱惱を見知らすのか。アそれは無分別。道具譬へて言はゞ濁り江に。月の宿らぬ如くぞや思ひを。善途に翻へして。フシ勸じより佛に御寄進あれ。女中はどつちへ通つたや。白紙夏書反古によらず。一紙半錢の奉財の輩は。此世にては比類なき手柄に誇り。御家來ならば。數千人の上に座せん。奇妙輕薄。いやながら申すと言はせも立てず。詞ナア急ぎの用で通る者。地邪魔ひろぐなと跳飛ばし。フシ蹴飛ばしてこそ通りけれ。詞エ、埒もない八九三の脛に出合うて。勸進帳を棒に振つた。ア、まゝよ。地唯鬼に

角に何時迄もまゝよと思はぬ善哉丸。廻り逢ひたやア、痛やと。腰撫てさすり砂打拂ひ。起上つたる向ふより。荏柄が妻は世を忍ぶ辛き憂目も三度笠。難行公曉の手を引いて通りかゝるを阿闍梨はやがて。若しやと覗けば身を交し。避けて行かんと笠傾け。右へ寄ればもつれ寄り。フシ左へ寄れば。纏ひ付き。小腰屈めて立塞がり。それ。つらく面影見れば。大事の國守の預り物は。手事賣の箱にかくれ。生死不定の世の中を。一遍尋ねぬ。所もなし。此處に邪魔して。顔見せぬ女中一人おはします御名をば。銜妻外道と名付け。奉り幸ひの。小笠に隔て。せんほ盡果て。鐵灸眼にかけるぞと。立寄り給へば。詞ア、是坊さま。しみ執拗い此方も同じ修行の身。地奉加は五につく。算用なしに通して貰はう。道の邪魔ぞとすり退くを。どっこへ。フシ大新發意を改むる。斯程弟子の善哉に。よく似た姿を。怪しみて。鶴が岡の別當。無體に此子を勸進すと。仰せを聞いて公曉はやがて笠脱ぎ捨て。ナウお前は阿闍梨様。そりやこそ尋ねる善哉丸。詞拟は己れは鳥賣めが女房か。地其子は此方の預り物。事なく戻せば其通り異議に及ぶと許さぬと。地藏菩薩の錫杖。追取り小脇に掻い込み。睨み付けたる眼はくる。フシ久留尊佛の。如くなり。詞ア、申し。地色必ず御鹿相遊ばすなと。笈を下し手を仕へ。詞拟は鶴が岡の別當様にてましますか。地色成程其鳥賣は自らが夫荏柄の平太廬長。是には段々申譯あり暫くと。宥める後の木蔭より。伴藏主從忍び足。追取り卷いて大音聲。詞ヤ荏柄が女房通れぬ所腕廻せ。其悴共に搦め捕れ。地承ると寄る所を。用意の刀を抜く手も早く。先に進みし下人が肩口肋をかけて向ふ袈裟。はらりずんど切離せば。先を取られて主從三人。後れながらに打つてかゝるを事とせす。縦横微塵となぐり立て。フシ山道さして追うて行く。地色阿闍梨は斬合ふどさくさ紛れ。公曉を連れて立退かんと。思ふ折ふし又足音。兎やせん角やと氣を辟き。半分出来たる勸進より佛。すつばり着せてそらさぬ顔。フシ荏柄が妻は立歸り。詞ヤア公曉様は何處にぞと。地尋ね廻ればコレ。女中。詞一紙半錢の奉財でコレ此一子。地藏菩薩の胸より下が。建立なされて。地愚僧が大願成就と。悦び給へば此方も幸ひよき折と。ア、お嬉しや忝なや。

尼君の仰せと言ひ以前の通り御弟子となし。御出家堅固を頼み上げます。自らは是より嵯峨逢坂の縁を尋ね。夫の行方身の安否。都に足留め申す所存。何を申すも事急なり。始終の様子は此お子に。御聞きなされ下されよと。餘儀なく言ふに。調オ、拙僧が受取る上は。壽命は千年鶴が岡へ。隨に守りまし御入佛。氣遣ひなしに落ちさつしやれ。地アレ又向ふに大勢人音。見付けられては互の邪魔。調坂への道は左手へ。愚僧は爰にて敵を騙りやり過してゆつくりと。地鎌倉指して下るべしと。笈をともし脊負はせて。オクリ笠を。ヒロヒ煙管も腰にはせ。さらばも口早に。名残をちやんと鉦の聲。フシ嵯峨の奥へと落ちて行く。地阿闍利は公曉を厨子に入れ。下郎が死骸の血を取つて。我身一ぱい塗り散らし。よろぼ伏して在します。地程なく伴藏加勢を入れ取つて歸せば別當は。わざと苦しき聲音にて。調ナウく方々。文彌調ア、扱て苦しや堪へ難や。尋ね逢ひたる幼子は又女めに奪ひ取られ。地剩へ此の如く身内の深手に眼もくらみ。詞心がぐれ。ぐれとして沈み入るやうに侍るなり。此體ならば因果つべし。御身達を誰やの人やら知らねども。若しも空しくなるならば。地敵を討つて給はれやと。フシいと苦しげに宣へば。ナホス皆々誠と目をこすり。詞エ、むごたらしい目を見る事かな。氣遣ひあるな坊様。地敵を取つて得さすべし。扱々憎き女めいで。追つ駆けんと行く所をアイヤなう。文彌調ヤそつちへは逃げなんだ。右手の道から難波瀉短かき日脚急がれよと地言へば點頭き吞込んだと。大勢引連れすまたの街道當途もなしに。フシ追うて行く。ナホス地阿闍利はそつと上立り。調ハ、ハ、ハ、ハ。さつても甘い追手の衆。脇道へやつたれば我行先にも氣遣ひなしと。地地蔵ぐるめに背に負ひ。調どりやどりや去のぞ。サア去のに河原の地藏菩薩。十より上の嬰兒を。地肩にひつかけ足早に鎌倉指してぞ三重時しるや。フシ秋は木の葉も。色付いて。錦を飾る小倉山。地色麓に四季を建分けし。春は愛宕の花見の亭。長地夏は嵐の山うけて秋は其まゝ紅葉を。多枯急ぐ鴻臚館。スエ爰て小倉の山莊に。祖父定家の筆の跡。拾ひ集めて爲氏卿。百人一首と題を据ゑ末世の人に傳へんと。内裏を離れ山里に。心を澄ます名歌寄せ。フシ奇特にも亦物さびし。地色召

使とて留守もりの車戸次夫婦は五十越し。白髪半分黒眼。光らす慾の貝浚へ。妻も名に負ふ竹箒掃き込むばかり塵一ツ。散らさぬ上のよく案じ。詞コレ親父殿。此様に毎日々々掃除しても。鏝半銭落ちてはなし。うか／＼と暮して未の六十日が詰らぬぞや。オそれも思うて居るてや。爲氏殿に使はれ。歌詠んだとて錢にはならず。鎌倉にをる娘めが内に居るなら賣つてやり。田地一反の主にもなるが。地思ふやうにならぬ世界。詞ちやが氣遣ひすな。ちつと人に頼まれた事がある。是が手に入ると大きな金々。地色よい身に成つて見せうぞと語れば共に女房が。詞そりや其當は俺もある。ナンデヤ其方も誰ぞに頼まれたか。オ、テヤ。むまい／＼。してそれはと掃除をやめ。地色話半ばへ荏柄が女房笈を背中に逢坂で。在處を尋ね此家を目がけ。ちとお頼み申しましょ。詞關の車戸次といふお人内方になら逢はしてと。地色いふに夫婦が柴戸を明け。詞ヤ其方は娘のお綱でないか。父様母様でも久しや。前の所を尋ねたと。地内へ入れば母親は不興顔に立寄り。詞ヤイ爰な恩知らず。伊勢参りをかこつけ六年以前に家を出て。それより鎌倉にゐるとばかり。夫婦の者に貢もおこさず。榮耀らしい國巡り。地色又食ひ倒しにうせたかと。子を子と思はぬ無得心。其氣を知つて出次第に。詞成程お叱りは尤もさりながら。今は私も仕合せ致し。ちとした事で夫の行方。尋ねながらの廻國。地路銀もたアんと持つて居まする。お前方への土産はきだる。是迄の事了簡し。一夜泊めてとむまい事。フシ齒に合ふ事を言ひ散らす。詞何ぢや路銀も土産もあるとや。オそんならようござつた。コレ親父殿。久しぶりの娘。何ぞ馳走をして下され。地おつとまかせと小尻をからげ。おりや嵯峨へ往て荒鮎買うて來う。溜乳飲ましやと機嫌して。車戸次は表母親は。イザ先づ奥で東の話。草臥ならば親甲斐に足さすつてやりませう。一足擦らば千兩くれう。二足擦らば萬兩と。當なき當の槌で庭。フシ掃ささし伴ひ入りにける。はや暮れかゝる。秋の日の。臘月影身に受けて。よしあり氣なる浪人の風呂敷包みちよつこりと。似合ぬ風の旅姿。笠傾けて柴戸に立寄り。たそお取次頼みたし。詞爲氏卿の歌道を慕ひ。押付けて參上申す。地色宜敷御沙汰と案内の。出合ひ頭に爲氏卿一間を明けさせ給ひ

しが。調歌の道に心をよせ。慕ひ來たとしをらしむ。地苦しからず此方へと仰せにハツト威儀つくろひ。怖ず臆せず目通りに頭を下げ。調承れば先生には。百人首を選び給ふ由。及ずながら拙も。腰折れにても加へ度く。地推參申し候と卑下せし詞に爲氏卿。詞ホフ、頼もしの旅人やな。過し頃新古今集を選ましかども。花ばかりにて實は少く。祖父定家の心に叶はず。我此山莊に引籠り。書残されし色紙を集め。百人一首と題をす。末世に残す和歌の道。地色時至らぬか是非もなや。九十九首は撰りたれども今一首不足せり。何とぞ御邊詠足し給はゞ。フシ喜悅ならんとありければ。調さん候某は關東者。千賀の鹽竈を一見致し。浦漕ぐ舟の面白く詠みかけし其歌は。世の中は常にもがもな渚こぐ。漁士の小舟と迄はつとり候へども。下の七文字に迫り三十一文字成就せず。地色あはれ御添削あつて百首に加へ給はらば。後代不思議の面目とスエ思ひ入つたる風情なり。地色爲氏暫らく歌を吟し。詞ハア、奇妙々々も世の中の體は。浦こぐ舟の跡なきと言ふ心を以て詠みかけし歌。下の七文字こそ猶一大事添削に及ばず。貴殿旅人の身なればいづくも同じ旅の空。地今宵は是に一宿あり七文字案じ給ふべし。イザあの間へとの御差圖。疲れに辭儀も遠慮なく。兎角は御意に任せんと。しづ／＼立つて雪見の亭事も御縁のはしくれを。曾つて一夜は明石潟。嶋がくればして入りけるは。フシ唯人ならじと。見えにけり。地色爲氏卿は文臺に數の色紙を取集め。何れが巻頭巻軸の。始終を分けんと氣をこらし。心をすまし思はずもとろ。オクリとろ。へまどろみフシ給ひしに。寢鳥の聲の。物さびていとしん／＼と夕なぎに。焼くや藻鹽の身をこがし。顯はれ出でし齋姫。慕ひ寄るこそ物憂けれ。地色爲氏ふつと御目を交し。ア、ラ怪しからずや。詞實朝の妹齋姫は。荏柄の平太が手にかゝり。空しく成りしと聞及ぶ。地色もしや虚説か但し又。我つれ／＼の思ひに引かれ。迷ひ來りしものなるかと。思はず一間を駈出でて。フシ立寄り給へば。ナウ恨めしの戀人や。君がつれなき心から。思はぬ人に思はれて。仇に此世を。去りしぞや。思ひ切られぬ輪廻の絆。苦患を救ひ給はれとよ。詞オ、實に道理さりながら。和田北條が争ひの盛りの花を折取つて。地色非道と言はれん悲

しさに。故意と強顔く言切りし。未來は一蓮托生と。御回向あればいや／＼。とても御回向なすならば。此の世の縁を結び置き。後世を助けて。給はれと、フシ打ちしを。れてぞおはします。詞げに／＼現在の果を見て。過去未來を知ると言へば。地此世の縁を願ふは理。唯此の上は二世三世。此世も未來も夫婦ぞや。心よく成佛と。仰せの内より柴垣押分け。謠千秋萬歳の。千箱とかなで。ナホス地三方に。長柄を取添へ荏柄の平太。立出づるを見て爲氏は。コハそも如何にと御驚き姫は軋て色直し。オクリ衣紋いつくろふフシ折からに。地色車戸次は表へ戻りがけ。女房庭に立聞きを。するとも知らず荏柄の平太。遙に退り謹んで。詞君情なくも和田北條が異論を思召し。姫が志取りあへ給はず。去る勅使御下向の後。地色思ひ焦れて相煩ひ。命も危く候故。詞親にて候城の九郎某を招き。和田北條の確執は姫君を幸ひに。入道親子がなす業。汝宜敷く計へと申すに付き。新參の腰元を殺し。衣裳を着せ替へ首を隠し。姫を討つたる體にもて成し。御供申し立退きし其跡にて。親資國も切腹致せし由。是と申すも姫君の御願ひを叶へたさ。地色様々心を盡くせども御賢慮の程計りかね。近寄る手段の偽幽靈。斯く迄主従心を盡す。心底憐れと思召し。御縁を組ませ下されよとスエ餘儀なく言ふに姫も共々。あられぬ姿に身を變へて焦れ徘徊ふ有様を。不便なとも可愛いとも。唯一言の仰せはないか。心強やと縛りフシ付き。歎かせ給へば。地色爲氏卿岩木ならねば心解け。詞ハテ一旦は世の人口。期して辭退は此方から。地得致すまいと戯れて。じつと抱き締め給ふのが現世未來の即身成佛。フシいつそ殺せの睦言に。地色荏柄は勇んで目出度し／＼。お盃よりお寢間が肝腎。又もや御意の變らぬ契り。紅葉の亭てしつぱりと。何處も彼處も紅葉の。お手いらずが御馳走と。味な所を自慢して。オクリ伴ひへ一間にフシ入りにけり。地色車戸次は始終聞き濟まし忍び入れば女房も。差足して傍に寄り。何と様子を聞いてかと。言ふ口押へて高い／＼。詞是につけても北條殿は。先潜の早い和郎。齋姫を平太が討つたとは心得ず。爲氏に首だけの女。忍び行くまいものでなし。奪ひ取つて渡さば。褒美は望み次第との内通。地出世の種とは此事と語れば共に女房が。詞ハテナウ。大名の心は九

分十分。妾が方は縁ある故和田殿よりまつ其如くの頼み事。則ち隣村へ捕手の役人。地是へ渡せば褒美と引替へ。出世は仕勝と夫ても。慾に隔つる熊手性。見込んで點頭き出来た。詞奥へ道路のならぬ某。兎角は其方が心任せ。シテどうして盗出す。是幸ひの事がある。娘が脊負うて來た笈の内へ。姫を騙して押込め。裏道からノ。合點かと。

地私語り事を吞込んで。よい時分に噎せよ。それを合圖と言ひ合せ。車戸次は勝手へ身拵へ。フシ女は奥を窺ふ所に。地色娘の綱手は物陰で斯くと聞くより走り出て。立塞つてコレ母様。詞あのお供した侍はわしが尋ぬる夫。姫君はお主。奪ひ取らす事ならぬぞえ。地色まだ慾心は直らぬのと。諫めかゝれば。コリヤ言ふな。詞年寄つて色氣はなし。慾知らいてよいものか。地聲立て居ると是ぢやかと。懷劍逆手に突つかくれば。詞ア、危ない。親として子を殺す地邪見な心といふを打消し。詞ぬかすな。己れは幼き時犬の餌食となる奴を。末頼みに育て上げ。物にせうと思ふ内。よう家出をひろいだなア。恩を思うて母と一所に姫を盗出すか。地厭とぬかすと突殺す。サア返答と手詰になり。詞成程一味致しましよ。何ぢや一味。イヤ合點がいかぬ。油斷さして爲氏や。夫にぬつくり言はうでの。それとも誠の心なら。己れが恐るゝ地獄とやら。神も佛も打込んで。恐しい誓文聞かう。あの母様の勿體ない。惡事にもせよ親の事。地わしが口から言うたらば舌は八裂き車裂き。阿鼻大焦の苦を受けう。其代りにはお情に。一味は許して下されとスエわつとばかりに。フシ泣沈む。詞オそれ程一味がせつなくば。親の因果ぢや許してやらう。其代りに頼み事。コリヤ姉よ。其方が夫。あの平太が氣味が悪い。爰へ呼出しおこしたら。酒を盛つて盛りつぶし。よう寝入らして置いてたも。姫をそびき出す迄は。大事の事ぢや色目に出すな。此方等が出世の跡取りは。釜の下まで其方が物。エ阿呆めと地猫撫の。毛色優しく言廻し。爪磨立てゝ奥の間へ。窺ひ行くぞフシ恐しき。地色跡に綱手は詮方も涙にくれて居たりしが淺ましや我ながら。育てられたる厚恩の親といふ字に押へられ。お主の大事も得言はぬか。何の因果であの衆と。親子の縁を結びしぞと。昔を悔み身を恨みフシひとり。託ちてある所へ。地荏柄の平太胤長。我に逢

はんと呼出すは誰人なるぞと立出て。見れば我妻。詞ヤレ女房が珍らしやと。地駄寄る夫に抱き付き。ナウ逢ひたかつたによい所へ。よう出て來てと急せき上のぼす。心は撞し木早鐘しやうの。フシつきしほも無き風情なり。詞ハテこな者興きようが挨あ拶さ。先づといふ。嚙くはぞ國元くにもとでは某たが。姫君討つたとの取沙汰。其方も難儀しつらん。公曉こうきようは何とした尼君にきみへ戻したかと。地色何かの事を問ふ間も待兼ねコレ。姫君のお身の上。氣遣ひな／＼と。奥へ目を付け氣を配り。急きげば急きく程。詞オ、討つたと思うてお身の上。氣遣ひしたは道理々々。御安體ごあんたいにてお供して。爲氏卿と御祝言。其方も從したがへ目出度いと。地何の懸念けんねんもない夫。氣が付けがしと女房は立つたり居たり身をあせり。言はんとすれど親の科しな。口に溜たり胸に充みち。幸ひ有合あふ銚子鍋酒しやうなべの力で一口と。土器かまどけ取つてちやうど受け。ぐつと乾せば夫は手を打ち見事。久しぶりて女夫めうふの盃。テエ戴おことすり寄れば。持つて飛び退き涙聲。詞コレ盃どころかいの。ヘエ、情ない。地言ふに言はれぬ胸の苦しさ。恩も義理も思はずば。いうて／＼言ひ破り安穩あんどんでは置くまいものと。親を恨みの心とは。夢にも平太知らばこそ。詞ハテきつい恨みやう。如何様いかよう連添れんぞんふ夫が不義を言ひかけ。姫君を討つたと思はゞ安穩あんどんでは置かぬ管。惡戯にくげ者め不義者めと。言うて／＼言ひ破り。食付く程に思ふは尤も。地色サア仲直りの盃と。じやらけ掛ればいや／＼。詞言ふまいと言ふ誓文ちかもんは立てたれども。言うて退のけう。ハテもう言はずとよいはい。今夜は姫君の御祝言。あやかつて我々もしつばり機嫌直しや。地直しやと底の心はしら浪の。フシ帆かけて來いともつれ寄る。地色綱手はあるにもあらればこそ。本氣で言はれぬ一大事。酒の力と汲み流し。飲んで胸据を。胸を据を。何の儘ままも儘ならぬ。親の惡名いふも憂し。言はねばお主へ不忠となる。兎やせん角やと胸築むねづきて。打込まるゝより辛つい酒。受けては干し。詞コレはしたり。地受けては干し。詞コレハしたり。地手酌てしやくは呵責かちやくの泣なむ熱湯ねつたう。阿鼻あび焦熱せうねつの苦しみを。我と我てに受けるかと。言はず語らず思はずも。わつとばかりに伏ふ沈しづむ。地心知らねば夫は呆おろれ。詞こりや留守の間に阿呆あほうが上り。底抜けの無き上戸。おとましや又持病ぢびやうの瘡かさが起らう。地正氣を付けよと抱起せば。むく／＼と起上り。ひ

よろ付く足の他愛なく。酒飲んだに依つて酔うたが何と。こなんも酔うたかひよろ／＼なざるゝよ。コレは迷惑。其方が足がアレ危ない。それ危ないと。地あぶななる程猶ひよろつき。詞あぶない事お前も知つてか。あぶなか萬事に氣を付け召され。此家の祖父祖母私が親。それで何にも言はぬぞえ。誓文立てたて言はぬぞえ。地お姫様をばコレナウ。詞言はぬぞえ。地言はぬ切ない心をば。推量して給へ我夫苦しいのとうど伏し。泣く音と共に寝入りしは。フシ哀れにも亦是非もなき。地様子言はねば一筋に。酒の科ぞと平太はうつかり。詞テモしやれるは／＼。夫の側とも言はず高断言分あれども。言はぬぞえ。久しぶりぢやに依つて。言はぬぞえ。如何様女の酒の酔はどうやら憎うないもの。お上にも今時分はお唐臼の最中。地色我にも一白めん上申そと。戯れ寄ればコレ／＼。詞お姫様のお身の上一大事がある。油断する所でないかと。地寢言にびつくり遙に飛退き。詞ヤアラ心得ず。すべて寢言と言ふ物は。己れが心に思ふ事。なす事いふと聞き及ぶ。地色一大事とは心元なし。返して聞かんと氣相變へ。詞ヤイ女房。姫君のお身の上。油断すなどは何の事。地一大事の事言へ聞かんと咎めて見れば。詞成程。今言ふはみな寢言。本性では言はれぬ事。此家の留守守り。車戸次夫婦はわしが親。五つの年から育てられ大恩受けし身なれども。あまり情ない慾心を見限り。家出をして東に下り。縁でこそあれお前と夫婦。其恩受けた二親が。和田北條に頼まれ。今夜姫君奪ふ等。様々の意見も聞き入れず。他言せまいと恐しい誓文。さもなくても親の事。子として言ふは思知らず。道を思うて現の空言。わしやよう寢入つてゐますぞ。ムウ聞えた。出来した。連れ／＼。汝が酒は鴻門にて勢ひ込んで駈行くを起上つて裾に取り付き。詞惡人とは言ひながら。義理ある親の大事を漏らし。地天道如何で許し給はん我から先へと夫の刀。拔取る所をしつかと押へ。詞ヤア狼狽へたか女房。汝が言うたは皆寢言。現て我は言はうがな。それでも眼前コリヤ。夢ぢやないか。夢の醒めやう未だ早い。地まそつと寢よと突飛ばし。又駈行くを猶取

付き。詞わしが爲に親なれば。お前の爲にも舅姑しやうとく。地了簡付けて給はれと。スエテ縄れば流石進みかね。詞よし

よし左程に思ふなら。今見た夢の夢合せ。眠り覺さす思案あり。地我に續けと諸共に。引連れ立つて一間なる。フシ紅葉の亭ちんへと駈り行く。地色八聲の鳥の音も過ぎて。車戸次が妻は奥の首尾。まんまと仕畢せ夫をは。呼出す合圖の聲しやう。それと悟つて来るを待ちかね。詞これ。爲氏が寢入りし内。姫を密かにそびき出し箠へ押込め。次の間に出してある。和田へやる氣か北條へか。地色此方の心を聞いた上此方にも思案ありと。相談の内荏柄は癒やがて。箠を開き姫

君と。女房綱手と入れかへて。フシ姫君引連れ入りにける。地色とは知らずして車戸次は間に合ひ。兎角盗み出しての事人音に氣を付けよと。フシ差足してぞ忍び行く。地色女房跡に目を利かし。松吹く風も蟲の音も。若しやと心配

る内。車戸次は姫と娘とを。入れかへある事夢にも知らず。箠を背負うて駈來り。サアしてやつた是からが。めいめい出世の仕勝ぞと。駈出さんとする所を。女房やがて箠に手をかけ。コレ親仁殿。詞和田殿の御家來は西在所さいざいに待つての筈。地道が違つた此方へと。引留むれば振放し。詞そげめやい。己れにはつと飽き果て。是をついで東下り。

北條殿へ渡さにやならぬ。地邪魔ひろぐと馴染の胸骨。踏折つてくれんずと。言捨て行くをしつかと捕へ。詞オおりや又姫を和田へ渡し。獨り出世の種にする。地こつちへ寄越しやと引戻す。シヤ。ひつきれめ味やると。駈出せば引戻す。戻せば駈出し。コハリ兩方が。我慢外道がまんぐわいどうと慾心魔王よくしんまおう。猛虎まうこの皮を爭ひし例も。ナホスフシかくやと。浅まし。

地色女の強慾積りてや重荷背負ひし親父をば。房屋にどうと引据ゆれば。憎しと車戸次は起きさまに。すらりと抜いたるだんばら物。コレ待つてと引つはづし。箠を楯たてに身を隠す。まつ二つにと及び腰。飛上つて斬付くれば女は遁れ中に立つ箠を二つに斬割つたり。中に敢へなや綱手が手負ひ。詞ヤこりや娘ぢや。地姫ではないと狼狽へ廻る其内に。平太は姫君誘いざなうて縁先に躍り出で。詞ヤアおのれらが工たくみを聞き。姫君と入れかへ置きしを知らざるか。地因果の程を思ひ知れとハツタと睨め付け。詞サア女房。最前言ひしは爰の事。地最後の夢を醒ませよと。言ふ聲涙手負も涙。ナ

ウ淺ましや父上母様。身内にたまる慾心が死出の山にて劍となり。責め詞まいたまれ給はん事。今見るやうで。フシといし
 きぞや。地色はより心を改めて佛の縁を結んでたべ。名殘惜しいは我夫。羨ましいは姫君様。お前は目出度う御祝言。
 我は戀しい夫に別れ。冥途へ嫁入り致します。是も何故二親の。酷い心で。心でと フシ恨み。涙の泣いじやくり。
 地色姫は悲しさ詮方も。涙と共に手を合せ。詞何にも言はぬコレ綱手。其方衆夫婦は氏神とも。我爲の結ぶの神。地神も
 佛も世にあらば。此難救ひ給はれと。わつと叫ばせ給ふにぞ。平太は猶も涙にくれ。詞姫君のお詞を。名僧知識の引導
 と。思うて未來成佛せよ。地名殘は互に盡させぬと。思ひ切つても切れやらぬ フシ心ぞ。思ひやられたり。地色哀れ
 を知らぬ車戸次夫婦。しをれし顔も胸算用。詞コレ婆。手盛食うた腹癪せに。其方も注進おれも注進。合點か。地合
 點と點頭うづなづき合ひ。立上つて駈出す所に。思ひも寄らぬ後の方。東西より來る矢先。車戸次夫婦が背骨にはつしり。う
 んとのつけに返るも天命。フシ唯一矢にて息絶えたり。地色姫君在柄はコハ如何に。何人なるぞと一間を明くれば。
 御主爲氏卿衣冠正しく立ち給へば。此方の一間に浪人は。忝くも右大臣源の實朝卿。四海に秀てし御顔色。姫も在柄
 も吃驚し。御大將の御機嫌を。如何と案じしを入る兩卿一度に悠々と フシオクリ一間を。へ出てさせ フシ給ひつゝ。
 地色實朝優美の御聲にて。詞我肉身の妹を在柄の平太に殺され。其又敵平太をば只今一矢に射止めたり。和田北條が異
 論すむ迄。地我は見ぬ振知らぬ振と。仰せに人々爲氏も。安堵の思ひ喜悅の眉。心の禮に腰折の。フシ歌の聖も尊敬
 あり。地色重ねて大將御聲も爽かに。詞イカに爲氏卿。我撰集に入らん爲。姿を驚し此家に来り。下の七文字に差詰
 り。工夫をこらす所に。今綱手が悲しみを見て。綱手悲しもといふ七文字が浮かんたり。地色和歌の道に叶ひなば百
 首に加へ給はれと。仰せに爲氏御手を打ち。扱は鎌倉の右大臣にて在ますな。詠みかけの其歌は。世の中はつねにも
 がもな渚なみさこく。漁士の小舟の綱手かなしも。ホオ、是ぞ誠に當意即妙。面白きといふ心を以て無常に通じ。則ち綱手
 がよき追善。九十九人に此一首。地色合せて百首百人首。我願望も成就と。悦び給へば今のは綱手。詞ナウ有難や冥

加なや。右大臣家の御歌に我名をもつて一首となし。末世に残す御供養。地常にもがもな漕ぐ舟は。常寂光の弘誓の舟。乗後れじと出るいきばかり。我夫さらばと敢へなくもフシ夢の夢とぞ消えにける。地わつと泣き出す姫よりも泣かぬ顔して掻き抱く。夫の心はよみと歌赤人ならぬ爲氏も。無慚や此世を猿丸の。紅葉踏み分け啼く鹿と。詠みしも夫を慕ふ歌天地頭の大將も。親に孝行天納受未來は上品上生と貴賤法師の分ちなく。回向をなしてほのくと小倉の。山の朝霧に。都を立つて東路や鎌倉。山に花咲かす和歌の名人達人は此大將の事。なりき

第 五

地武備盛んなれば却つて其身を亡すとかや。藤澤入道が毒氣を呑み込み。和田北條が確執今日を限りの戦ひと。フシ入亂れてぞ斬結ぶ。地色未だ勝負も決せぬ内。北條江馬の太郎義時。緋威の胴丸に星兜を猪首に着なし。悠々と立出づれば。紫裾濃の鎧を着し。和田新左衛門の尉常盛。コハリ負けじと進む敵味方。床几にかゝれば床几にかゝり。弱身を見せぬ勇將猛將。ナホス今ぞ手詰と軍勢も。フシ息を閉ぢてぞ控へ居る。地色北條義時詞を和らげ。詞和田殿には士卒の費を厭ひ。勝負を一時に決せんとの望み。尤もさこそあるべき事。イザ天運に任せんお立ちあれとあひしらふ。ホオ、潔し面白し。御邊藤澤四郎と心を合せ。齋姫を嫁らんと思ひ付かれしが家の滅亡。イヤそりや貴殿の事サ。入道がお陸を蒙り。我君の掣にならんとは野太し。北條がある内思ひも寄らず。和田がある内存分にさゝうかと。コハリ意地と意地を立て合ふきつ先。ナホス斬りかくれば受流し。突けば開き。打てば拂ひ。手練を盡す互の妙術。フシ既に危く見えける所に。地色暫しと酈かけて。阿佐利の與市義遠。荏柄の平太に腰纏付け。引立てて駈來り。戦ふ中を押分けて。詞ヤレ早まるまい御兩人。方々が望まるゝ齋姫は。是なる平太に殺され。今は此世に亡き御方。争ひ勝つたとて詮なき事。急いで姫君の敵首討つて胸を晴らし。双方陣を引かれよと。地天下の騒ぎを悲しみて。荏

柄に最期を極めさす。フシ忠義の程ぞやるせなき。地色心を感じ和田北條。進みかねしを荏柄の平太。怒る眼に涙を浮め。詞へエ淺ましや御兩人。三老職と言はるゝ身が。齋姫の艶色に迷ひ。一戦に及ぶとは武名の穢れも思はずか。争ふ元を失はゞ。邪氣執念もあるまじと。地痛はしながら姫君を討奉りし此平太。刻んでなりとも腹を癒て。兩家の和睦頼み入る。申す事も是限り。サア首取つて給はれと。座を占むれば。北條義時。詞才よい覺悟。サア常盛。汝が執心かけし姫の敵。急いで平太が首を取れ。辭儀に及ばぬわれ取れ。取るぞよ。地取れよと詰めかける。阿佐利の與市聲をかけ。詞荏柄の平太を手に渡し御存分に致すから。兩人共姫君へ愛執残す事なきか。地性根を定めて討ち給へと。云ふに義時打ちうなづき。詞假令姫君此世にあるとも。六道四生の迷ひ者化性の者よナウ和田。おんでも無い事一旦討たれし齋姫。若しや都へ生れ出て。爲氏殿に添はゞ添へ。それこそ幽靈其時に。又島蒙持つて出てよ。地此の世の暇を取らするぞと。振上ぐる太刀の蔭コリヤ待て和田。詞與市が志の此科人。切先争ふ眞中へ渡したからは二つ割り。首は其方へ脛は此方へ。まんがちさせぬサア討てと。地平太が上帶確かと取る。オ、軍場の血祭。是見よやつと飛上り。はつしと打つて打落す。兎ばかりが地に落ちて。無事な體を北條引退け。詞和田が胸中顯はれたり。軍勢引けと呼ばれば。地和田も同じく聲をかけ。姫に執心なきからは皆入道が讒言よ。詞此常盛を亡ぼして。謀叛する氣と言うたぞや。貴殿も我を亡ぼして。天下を奪ふと言うたぞや。然らば先君頼家の。姫遣らうとの上意も偽り。地それよとと打解けし。兩家の和睦に阿佐利も勇み。平太は元より姫の事。一埒したる嬉しさはフシ天へも上る心地なり。地色かかる所に思はずも一叢繁る森の内より。耳を突抜く鉦太鼓。時をどつとぞフシ上げにける。地色スハ何者ぞと見る内に。藤澤入道馬上に跨がり聲張り上げ。詞ヤア／＼それなる和田北條。耳を浚へてよく聞け。銘々が威勢争ひに鎌倉を騒がす條。實朝卿以ての外の御機嫌。急ぎ兩人ども誅せよとの御意を受け。某親子向うたり。恥を思はゞ腹を切れ。如何に如何にと呼ばはつたり。地シヤ愚人夏の蟲。火の中へよう來たと。阿佐利北條和田荏柄。拔連れ／＼切り

かくれば。何かは以てたまるべき。一先づ引けと森陰に。どつと返せば餘さじと。フシ息を繼がせず追うて行く。地江戸斯くとや誰か告げたりけん。阿佐利が女房板額女。赤地の鎧に鉢巻しめ。好む所の大長刀。右手の小脇に掻い込んで。フシ飛鳥の如く駈來り。地色左手を屹と見渡せば。矢叫びの聲天地に響き。戦ひ半ばと見えにけり。詞ヤレ嬉しやまだ軍は眞最中。地憎しと思ふ坊主め親子。觀念さしてやらうぞと。駈行く向ふに隠し勢。鞍子品川足柄六浦四人は名に負ふ古今の勇士。板額御前を討取れと。四方より追つ取巻く。シヤ。詞いとらしい若殿輩。獨りの女に四人の。お敵は腰が張るけれど。大きな形ていやとも言はれず。お腹へ乗せる其代り。此長刀ハサアごんせと。地持つたる得物の大長刀。受けつ流しつ水車くるりくくと振廻し。爰に追詰め彼處に追ひ。火花を散らして。三重、戦ひしが。地色暫時の間に四人の者。フシ一度に息は絶えにける。地色猶もむらがる軍勢を。一人宛はまどろしと。長刀打捨て大手を擴げ。多勢の中へ飛びかゝる。女天狗の女郎坊鼻の低いが難ばかり。目よりも高く差上げて愛宕山の土器投げ。はらりとフシ投げ散らす。地森の内には和田北條。爰を最期と切立つれば。數多の軍勢皆ちりく。藤澤入道親子の者。一先づ本國藤澤へ。引けやくと下知をなし。馬の鼻を立並べ落行く所を板額女。待設けしと物陰より。飛出て尾筒をしつかと取り一方車に引廻し。中に立つたる女の古木。入道いらつて聲をかけ。詞コリヤく四郎大力と言ひながら高の知れた女武者。鎧に障泥打當てく。一鞭くれて乗出さば。女が體を引裂くか腕を兩方へ引抜くか。二つに一つは知れた事。手綱弛めて乗出せと。地下知に隨ひ駈出すをどっこいと引止め。詞アラしをらしのお指圖や。此方衆二人のお首をば。大盃に掘り直し。夫阿佐利と仲直し。ざんざんざつと渡せばよし。さないと愛目これ見よと。地金剛力士の力足。乗手もさすが馬上は得たり。どうくくと乗出せばきりくくと引戻す。駒は四足を踏固め。女は一足ふみ占めく。大地を踏抜く其響き。地震雷一時に。鳴出す音も。フシ斯くやらん。地色板額荷つて左の方。四郎が乗つたる栗毛をば。尻居にどうど引据ゆれば。馬は前立ち乗手は逆様。落つると其儘フシ乗代

り。地色一鞭當つれば流石は名馬。すつくと立つて高嘶^{たかひびく}き。南無三寶と藤澤入道。眞二つにと抜きかざし。討つて掛ればひらりと外^うし。打物の腕引掴み。持直す手もあら金^{がね}の。熊手に引つ提げ引明くれば。落馬の四郎は起上り。親討たせじと飛びかゝるを。是も同じく引つ掴み。鞍の前輪に押付けて。片方^{かたへ}は差上げ片方は掻^か込み。調藤澤入道親子の者。生捕つたりと地呼ばはりの。聲と等しく和田北條。阿佐利荏柄も駈來り。是を夫婦の仲直し機嫌直し色直し。今日の手柄の大將軍。やつぱり其儘入道親子も其儘々々。御前へ引いて我君の。鏡にかけて天照^{あまて}らす。神の御國の仕置^{しおき}者。納まる御代の験^{しるし}ぞと悦び。勇み立歸る實^ひに。神國の道直ぐに。源氏の末は萬々歳。目出度かりとも中々申す。ばかりはなかりける

